



# 統

法財人團  
統  
一團發行

## 次 目

本佛釋尊の神通力(前篇).....	本多日生
日蓮宗概観(其十一).....	故梶木顯正
開目鈔講話(第十四講).....	小林一郎
釋尊の御成道.....	礮部滿事
北支より.....	小林啓善
銃後録.....	木田芳雄
記事	

○本部開報

○福島支部報

號月二十年二十四第

## 財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サズ所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進んで法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グれば

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持続セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

## 本團 畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ匯出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

## 本佛釋尊の神通力 (前篇)

### 本 多 日 生

#### 一、教化力と救護力

「本佛釋尊の神通力」と題して、本佛釋尊が吾等に對して今現にどういふ救ひを與へられるかといふことを話して見たいと思ふのである。神通力といふことは、人間の力で出来ない事を爲し遂げる神秘的の絶大なる力を謂ふのであるが、本來この語の起源は、神が通じて力用を起すといふことで、ちようど人間の身に魂が入つて居れば、人間でも人間の身に對しては神通力を有つて居るのである。即ち手を動かさうと思へば手が動き、足を動かさうと思へば足が動くのであるから、人間は人間の身だけに對してはそれだけの力用、即ち神通力を有つて居るのである。そのやうなる力用を佛様の上に於て言へば、この廣き天地諸法の間にその神が通じて、ちようど人間が身を自在にするが如くに、この宇宙の諸法を自在に動かして行く力があるといふことを、これを神通力と申したものである。一概にたゞ不思議な力と言つて怪誕不稽な事を言ふのではない。人間の身に人間の神が通うてはたらくが如くに、佛の絶大

なる魂が宇宙の諸法の間にはたらくを得るものだといふことを教へたのであるが、併しその神通力の顯現といふものは非常に廣い事で、お釋迦様が人間の世の中に生れてお出でになるにも、時を測つて迦毘羅衛城に降誕せられたといふことは、即ち佛の神通力よりして出現といふことがあるのである。それが八相成道の儀式を示して出家成道、轉法輪となり、一代五十年の説教も悉く如來の神通力である。その他衆生教化の事柄、すべて神通力である。又擴げて言へばあらゆる世界に身を分つて、分身應現して衆生を濟度せられる、これも神通力であるから、神通力といふものは廣大無邊にして、簡單には言ひ表はし得ないけれども、たゞそれが無暗に不思議な勝手放題な事をするといふ譯ではない。半面にはチャント眞理に適ひ、法に適つて居るが故に、これを如來の神通力と申すのである。

如來といふ語もそれから來て居るので、「如」はすべての諸法を指して、その宇宙にあるところの眞如諸法といふものと、佛の魂と一つになつて、それが人間の前に現れて「來」ッてはたらくから、これを「如來」と申して居るのである。眞如その儘が人格を執つて吾等の前に活躍して居るといふことを「如來」と申して居るのである。故に法華經の經文の方から申すならば、方便品に

是の故に今は大自在力を得たり、法に於て自在にして法王となれり。

と仰せられて居る。佛様の御力用といふものは法に於て自在を得たりと言つて、宇宙の總ての事柄に對して、思ふが儘にそれを動かし得るものである。それ故に「法王」と申して、此處で言ふ法王は、羅馬

法王とかいふやうなさういふ小さい意味ではないのであつて、大宇宙に對して一切諸法を支配する意味を指して「法王」と申して居るのである。

佛様は左様に超人的な、吾々人間の出來得ない事を爲さる廣大無邊の力を有ちになつて居るといふことは、佛法を信ずる以上は一切經の上に於て皆認めて居る譯であるが、それが下手に行くといふと、怪誕不稽になつてたゞ不思議な事ばかりする、例へば多く神通と言へば、空中に昇つて水を噴出すとか或は火を吐くとか、毒蛇に出會うても毒蛇に喰はれなかつたといふやうな事ばかり列べ立て、怪誕不稽な奇蹟といふやうな事のみを神通と思ひ過ぎた者もある。それは非常に偏つた間違つた觀方であつてさういふ事を申すのではない。一番大事な問題は、その如來の神通力が一切衆生を救ふ上にはたらく力、その一つの主なるものは教化力と申して、一切衆生を教化せられるところの御力用が、賢い者に對しても、愚かな者に對しても、五十年の説法教化といふものが、歡喜三昧と申して、その人に適合するやうに、毎も方法を誤たずして、釋尊の前に出し者は残らず救はれて居ることが、佛の教化自在力と申して廣大無邊の力である。その教化力が廣大である爲に、從來佛の御力と言へば殆ど教化力といふことに限られたやうになつて、殊に法華宗の如きは、その教化力より現れて居るところの、法華經を以て衆生を教化せられた點に重きを置いて、「法華經々々々」といふことに傾いたが爲に、如來の力よりも法華經といふことが大きいやうに考へてしまつたけれども、本來言へば本佛の衆生を教化なさる教

四  
化力の一部が、法華經の上に活躍したものである。すべての觀方がお經を通して見て行く爲に、どうしても佛が法を説いて衆生を教化せられたといふ方にのみ力を入れ過ぎて来て居ると思ふ。併しそれは無論大事な側で、釋尊が五十年の爲され方は殆ど説法教化に限られたほどに見えるのであるから、それは無論大事な事である。今日に於ても吾々は如來の教訓を通して心を導かれ、心を安んぜられ、様々な救ひを受けて居るには違ひない。けれどもそれだけが如來の神通力ではないのである。教化力といふことになると、天竺に出られたお釋迦様の所に廻つて、どういふ風に法を説かれたといふことから、その説教を通して佛を見んとするが故に、どうしても一たびは三千年前の釋尊の出現に戻して、その説教を通して如來の救ひを受けようといふことに考が及んで行くのである。その間に面倒な議論なども盛に起つて来る譯であるが、さういふ側でない方に、一つ廣大なる佛の神通力を見なければならぬ事があるのである。

それはどういふ方であるかと言へば、如來は常住不變であるが故に、毎でもお在でになるから、活きた如來の御力が今現にどうはたらいて居るか。三千年前に説教なさつた力も廣大無邊な難い事であるけれども、さういふ事でないに、今、眼には見えぬけれども、現に此處に在しまして吾等を護り、吾等を救うてござるところの救護の御力、これを教化力に相對して救護力と言つても宜からうと思ふ。教化力も救護力ではあるけれども、先づこれは教を通して救ふといふ方の力である、一方の救護力といふのは、眼には見えぬけれども、見えざる所よりして二六時中如何なる場合に於ても吾々を守護し、吾等を愛撫して居られるところの本佛の御力といふものを、時々刻々切々に活き／＼と受けて居る、その救護力といふことを十分に徹底して考へもし、説きもしなければ、却つて法華經の經意に適はないものであると、自分は深くその點に於て自覺する所があるのである。故にその點を明かにして置きたいと考へるのである。勿論この二つは偏廢すべきものではないので、教化力を少しも輕んずることも捨てることもないけれども、教化力のみを説いて、只今現に吾々の上に降つて居るところの救護力といふことをハッキリ意識せしめないといふことは、そこに迂遠な宗教の護りを免れないと思ふ。

## 二、神通力の理證

先づそれを道理の上からと、經文の上からと、他の實例と、日蓮聖人の聖語等から考へて、この自分の考を證明して置きたいと考へるのであるが、理論の證明は事簡單である。只今まで話した通りに、如來といふものは法に於て自在を得られて居るものであつて、如何なる場合に於ても、衆生を教化するに就て自在力を有し給ふものである、その中に特に天竺に出現して説法教化をせられたけれども、必しも出現説法せられなくても、如來は時々衆生を濟度する力を有し給ふものである。それはどうしても自在力を有するといふことに就ては、出現説法せずとも衆生濟度の力といふものをお有ちになつて居る

ことを認めなければならぬものである。現在に於てもやはり吾々を護つて下さる、吾々を導いて下さる見えざるの力といふものを、吾々は渴仰すべきものである。

それは他の宗教に就て考へて見るならば直ぐにその理論はわかる事であつて、例へば基督教の神様、これは吾々から見れば眞實のものではないけれども、併し彼等の説いて居る事を見たならば、神は全智全能にして如何なる事でも爲し得ると言つて居る。如來の自在神通といふことは無論全智全能であるから同じ意味である。さうして彼の基督の神なるものは、現在吾々の上に聖靈の感應といふものを降してその人が有難いと思つた所に直ぐに神が降つて、その人を護り、その人を救ふといふことを彼等の宗教の生命として居るのである。三千年前であるとか、二千年前であるとか、さういふ基督の降誕した時といふことの關係は何にも無い。基督の出現は或る年代を經過して居るが、神の吾々を護るのは、年代といふものは何等關係を有たない、現に吾々の上に聖靈の感應、活きた感應を仰いで、彼等はそれを信仰して居る譯である。

又淨土宗や眞宗の阿彌陀様を信心するのもやはりその通りで、阿彌陀様の成道を遂げたのは今より約十劫以前であるけれども、必しも十劫以前の所に廻つて阿彌陀を信する譯ではない、釋尊が阿彌陀經を説かれた所に廻つて信する譯ではない、やはり今現に西に在ると彼等は思つて居るだらうが、その西方に在る佛が吾々の上に慈悲の光を放つて下されて居る、そのあらたかなる阿彌陀如來を信すると彼等は考へて居るのである。

凡そ宗教は、どうしても現在に生き／＼したところの對象を得て、さうしてそれと自分の今動いて居る信念との結合に於て、始めて力ある信仰が起るものである。さういふ意味からだん／＼釋迦如來の御力用の尊さといふことを考へて見ると、あらゆる方面で説かれて居ることは、毎でも／＼釋迦如來は吾々に救ひの力を與へられるといふことを立證せんが爲に、却つて種々の説が起つたのである。それ等は要するに現在護られるといふことの一點に歸結して宜いことであると思ふ。それは曾つて自分が「實在の本佛を信じ得たならば、他の様々な信仰はそれに統一される」といふことを申して置いたので、さういふ意味合はこれ迄にも十分に説明して置いた譯であるが、結局それと同じ意味になるのである。一番大事なことは、只今現に活ける佛が吾々を護つてお在になるといふことを徹底的に信じなければならぬのである。

### 三、經文に顯はれたる神通力

次に經文の方に移つてこれを文證から説明すれば、これも洵に明瞭な事であつて、壽量品に  
汝等諦かに聽け、如來の祕密神通の力を、一切世間の天人及び阿脩羅は皆「今の釋迦牟尼佛釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と思へり、

然るに善男子我實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由佉劫なり

とあつて、即ち壽量品の一番大事な御語は「如來の祕密神通の力」といふことである。それは今此に現れて居る如來の隠れたる偉大なる力といふものは何であるかといふことに就て、それを説明しようとして起つた語である。さうすると第一の説明は、始め無き以前よりの實在の如來だといふことを説かれたのである。その始め無き以前よりの實在の如來だといふことは、後に對して又常住不滅であるといふことを説かんが爲である。その過去を説く所以といふものは即ち未來の常住を説かんが爲なりと、日蓮聖人も御遺文の中に仰せられて居るが如くに、何も過ぎ去つた事を説かんが爲ではない。始め無き以前より存在して居る如來なりといふことは、今日も不滅であるといふこと、寧ろ未來の不滅、後の實在であるといふことを論證するものである。

さうしてその始め無く終り無く毎も常住にござるといふことは、たゞ永く續いて居られるといふことだけを見るべきではない、その永い常住といふことは、その間に御力用があることを意味するものである。それは何かと言へば、その永い間いつでも自在自由に衆生濟度の活動をしてお在でになる。それは時間と言へば時々刻々、如何なる場合に於てもおはたらきになるし、處で言へば廣い世界の到る處に衆生濟度をなさる、その間に衆生をお救ひになる力といふものは、廣大無邊にして量るべからざるものである。そこでその廣大無邊の力を説明せんが爲に、何時も身を現して法を説くとか、或は斯う爲

さるあいなさるとかいふことがあるけれども、要するに衆生濟度の御力の活躍して居ることを説いたものである。

それ故にその意味合を能くわかるやうに考へる場合には、お自我崗にあるところの、  
我も亦爲れ世の父  
諸の苦患を救ふ者なり

といふ文を考へれば宜しいのである。この如來の神通力といふものはどんなに働かかと言へば、ちようど父が子を護り、子を救ふが如きものであつて、我は世間の一切衆生の父として諸の苦患、一切衆生の有つて居るところの様々な苦しみを、如何なるものでもそれを救ふものである。「諸の苦患を救ふ」と言はれて居るその救ふところの力である。さうしてそれは毎もその事を考へて居る。

毎に自らはの念を爲す

と言つて、その毎にいふことは、いつでも、即ち現在只今に於て、その大慈大悲の光が間斷無く吾々の上に及んで諸の苦患をお救ひ下されるといふことが、「如來祕密神通之力」の徹底した所であると思ふ。それを表面的にたゞ如來が世に出現し、説法をせられた、その出現に於ては本佛あり迹佛あり、説法には方便あり、眞實あり、いろ／＼あるといふ風に分けたのみにして、現在吾々の上に直接に無限の救護の力が下つて居るといふことにまで及ばなければ、それはまだ如來の神通力を能く了解しない者と言つて宜からうと思ふ。だから壽量品をスツカリ徹底して見たならば、如來の祕密神通の力を説くもの

であつてそれは諸の苦患を現在に於て救ひ給ふ見えざるの力が廣大無邊であることを教へるもので、何時でも何時でもその救護の力、神通の力に對して感激を有つて行くのが、壽量品を信じたる信念といふこととなるのである。それは結局時間で説いてあるけれども、時間さへ言うたならば、あとは佛といふものはじつとしてお在でにならぬものであるから、所謂「所作佛事未曾暫廢」で、いつもござると言へば、衆生済度のことは自からその中に含まれるが故に、時を以てこれを證明するものである。ちやうどそれは我國の國體の事から考へれば能くわかるので、我が皇室は所謂天壤無窮といふ語で表はされて居る。寶祚の隆へまさんこと天壤と窮まりなからん、斯ういふ語で言ひ表はされて居る。隨つて君ケ代の國歌でも、たゞ時間の長い事を表はされて居るので、「君ケ代は千代に八千代にさ々れ石の巖となりて苔のむすまで」といふことはたゞ、小さな石が巖になつて、その巖に苔の生えるまでといふ時間だけである。けれどもその歌の意味はたゞ時間だけを意味して居るものではない。その時間の内に皇室の聖徳が輝き、その聖徳といふものは即ち稜威の力となつて、内には國民を保護せられ、外には國家の理想を實現せられて、内外に對して廣大なる御活動を現し給ふ、それが永い時間を通して存在せられて行くといふ語の中に含まれて居るものである。だから天壤無窮といふ語を言つたならば、たゞ永いといふことに感激する譯ではない、さういふ事を天照大神が仰しやつたといふ舊い昔に復るのでなく、天壤無窮といふ舊い語に直感する所は、即ち天壤無窮の皇統が今現に續いてお在でになつて、即ち夜も晝も、今も現

在國民の上はその聖徳が輝き、その稜威の力が吾々を保護せられて居る、現在皇室の稜威の活きたる力吾等を保護してお在でになるといふことに感字すべきものである。それが天壤無窮といふ語に對するとこの本當の了解である。たゞ時間が永いといふことを時間だけで考へてしまつて、その皇室の稜威の力が現に國民を護り、國威を張つてお在でになる活きた力であるといふことに想ひ到らないで、舊い歴史の話だとか、その中間のいろ／＼の所に引掛つて居る間は、眞に我が皇室の尊嚴を了解したものでない。恰もその如くに、壽量品を讀んでたゞ久遠の佛だとか、實相の如來だとかいふことだけに引掛つて居つたのでは、眞に經意を解したものでない、その永い時間といふことは、それが本佛の活躍せられて居ることを意味するものである。さうして今申す通りに諸の苦患を救ひ給ふ、吾々の苦しみ、吾々の悩みを御救ひ下される譯である。

左様に佛様といふ語があつた以上は、そこに偉大なる力といふことを考へて、衆生をお救ひなされるといふことを併せて考へることが大事である。我が皇室といふことを考へたならば、皇室には所謂天祐が降つて、尋常の者の及ばない力をお有ちになつて居る。若し強めて言ふならば内に、叛逆の徒が起つても、この皇室の聖徳に双向ふならば、何者も皆打倒されてしまふ。昔より我が皇室に双向つた逆賊は一人として榮えた者は無い。皆撃滅された。さういふ偉大な力をお有ちになつて居る。外國からもしろいろ戦もあつたりしたけれども、日本の國には勝つことが出来なかつた。曾ては大元蒙古の襲來があ

り、又露西亞の不法行爲があつたけれども、皆日本に膺懲された。それは皆日本より強い大きな國である。日本は一溜りもなく潰されさうに見える強大なる敵に對しても、皇室の稜威の御力は絶大なる威力を現してこれを膺懲せられる。その如くに吾々が壽量品の本佛を信ずるといふことは、その本佛の力に依つて、内には吾々に如何なる足らざる所があつても、罪があれば罪を赦して貰ひ、自分に惱めるものがあれば惱みを救うて貰ひ、外に禍ひをなさんとするものがあれば本佛の力はこれを排除して、如何なる惡魔も、如何なる妨害もその人間に及ぼすことは出来ないといふ位に、内外の偉大なる護りを與へて下される力、それが佛様であるといふことを、本佛を考へる時に同時に考へべき事柄である。

故に方便品にも、

大勢の佛 及び斷苦の法を求めず

と説かれて、佛法を信心しない者は佛様のさういふ廣大なる力があることを信じない、さうして佛様の教に基けば苦しみが無くなるといふ有難さを知らない者、これを佛法を信じない人と云ふのである。随つて佛法を信ずる人は、佛には廣大なる力があり、佛の教には苦しみを除く力があることを信ずるといふことになるのである。譬喩品に説かれた「唯だ我一人能く救護を爲す」といふ文も、能く味つて見れば、教を以て救ひを垂れられる場合も無論あるけれども、他面から言へば教を通さなくとも、何時でも親が子を護るが如くに心配して下されるのである。學校の先生が物を教へて子弟を教導するやうな側も

無論佛様にはあるけれども、また家庭に於ける親が、寝て居る子供も、風邪を引いて居る子供も、泣面をして居る子供も、可哀さうなものだと思つてそれを救ひ護るといふ、母の子供を愛するが如き慈愛の精神がある、それが救護の力といふものである。

我身に力有り

それには廣大な力を有たなければならぬ、一通りの力では一切衆生のそれ／＼の苦しみを救ふことも、罪を打消すことも出来ないから、如來には廣大の力のあることを説く、その事は譬喩品の中にも、

と説かれて、我の腕にはどの位澤山な者がぶら下つても決して重いと考へない、そんなにしないでも他の方法に於て救はれるといふので、「衣衾を以てや、若くは几案を以てや」と言つて、衣衾のやうなものに依り、或は臨息のやうなものに依つても、それに依つて子供を導き得るといふので、説法教化といふことが起つて居るのである。愈々となれば如來は説法教化を藉らずして、直接自分の絶對の力を以ても衆生を救はれる譯である。

それ故に涌出品に來つては、佛が壽量品を説かんとすることを、そこに集つた人達が、佛は何の爲に今斯の如く爲さつて居るか、大勢の上行等の菩薩が出現したのであるかといふ場合に、これが佛が廣大な力を現さんとせられるのである。それが爲に茲にこれ等の大勢の人が集つて來られたのである。その力といふことを、壽量品を説く前の涌出品の所に於て呉れ／＼も言つて居られるのである。これも見



通してはならない大事な經文である。

如來今は諸佛の智慧、諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力を顯發し、宣示せんと欲す

今といふのは、これから説かんとするところの壽量品を指されて居るのであるが、それが「自在神通の力」とか、「師子奮迅の力」とか、「威猛大勢の力」とかいふ風に、「力」といふ語を以て説明せられた。それは今言ふが如くに、如何なる者でも救ふところの廣大なる力を顯さんが爲に、壽量品を説かれるのである。たと壽命の長遠を説くといふことは、前に言ふ天壤無窮の語のやうなもので、時間を以てそれを言ひ表はすけれども、その實質を言へば救ひの力の廣大なることを説かんとし、救ひの力が何時でも吾々の上に降つて居ることを知らしめんが爲に、時間に於ても常住であるといふ語が出て來る譯である。お自我尙の中にも神通力といふ語が澤山ある。

我常に此に住すれども

諸の神通力を以て

顛倒の衆生をして

近しと雖も而も見えざらしむ

この語の意味を考へて見ても、今申す通りに佛には廣大なる力があるから、隠して相を見せないのも、それが爲に衆生をして渴仰の心を起さしめ、衆生を救ふところの救ひの方法として身を隠して居る譯である。或は又、

乃ち出て爲に法を説く  
爲に佛には値ひ難しと説く

神通力是の如し  
我が智力是の如し

斯ういふ風に「方便力如是」とか「我智力如是」とか「神通力如是」とかいふやうな語は、緻密にこれを見るといふと、いづれも佛様の力の廣大なることを説いて居るのである。結局は前に申した通りに、常住不滅の如來が常に大慈大悲を以て諸の苦患を救ひ給ふ、その救ひの方法として教化力があるし、直接に見えざる所よりして吾々に感應を起して、吾々を救ひ給ふ力があるといふことになるのである。

そこで如來神力品が現れて、そこには歴々と表面に如來が大神通力を現はし、さうしてこの題目の内容も、やはり「如來一切自在神力」と言つて、如來の一切の自在の神力が籠つて、始めて題目が效能ある力となつて現はれる、「題目の力とは如來の神力なり」といふので、如來の神力を取れば妙法は空虚なものになつてしまふのである。五重玄としての妙法の力用は即ち如來の自在神力である。神力品に

諸佛世を救ふ者は

大神通に住す

とか、また、

衆生を悦ばしめんが爲の故に

無量の神力を現じたまふ

といふ風に、「神力」といふ語を以て最も能く言ひ表はされて居るのであるが、それは今まで申したやうな意味で、佛が衆生をお救ひなさる極めて不思議の力、その見えざるの佛の力を信ずる所に活きた宗教がある譯である。(以下次號)

# 日蓮宗概観 (其十一)

故 梶 木 顯 正

## 第四章 本 尊

日蓮宗では、本尊觀を立てる上に於て『三大秘法』を明すのである。其の三大秘法とは前にも云ふ如く一、本門の本尊。二、本門の題目。三、本門の戒壇の三である。

### (一) 本門の本尊

一體「本尊とは何か」と云ふに、本尊とは信仰を捧げる標的である。救ひの下る根元、利益功德の源である。この本尊の如何に依つて迷信と正信の區別が付いて来るのである、だから信仰の上にはこの「本尊」は一番大事な問題で、若し信仰はして居

るが別に本尊は無い、と云ふならばそれは宗教の信仰ではなくて、何んだか譯の分らぬものだ、と云ふことになる。今本宗の信ずる本尊とは、御相形の上から言ふならば、十界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間)の全部が皆「佛ト成ル」と云ふ事を顯はした曼荼羅(此の曼荼羅に「十界具足トハ十界一界モカケズ一界ニアル也、之ニ依テ曼荼羅ト云フ也、曼荼羅は繪でも文字でも何れでもよい、要するに曼荼羅也」と)の式に依つて示したものである。則ち云ひ換へれば、宗教哲學を公式といふ形式で示し現はしたものである。凡ての物には平等の側と、差別の側と二面を持つて居るものである。今曼荼羅の場合はその宗教としての平等の側を示したものである。この平等の哲理の上に差別の悟りの救ひ主、即

ち佛(夫に對する絕對者を云ふ)が救ひの法を持つて立ち、吾等衆生の前に救ひの手を延べて居玉ふことを、凡夫の吾等に教へて下さる菩薩(御弟子方)が現はれて御座る。之れをハッキリ云へば則ち日蓮宗では救ひ主は壽量品に顯はれたる久遠の佛陀釋迦如來、救ひの法は妙法蓮華經の五字、佛と法とを吾等に示して救ひの御手に繫れよと教へ玉ふ菩薩御弟子方とは、久遠本化のお弟子上行安立行等の四大菩薩である。(四大菩薩とは、一は上行菩薩、二は無邊行菩薩、三は淨行菩薩、四は安立行菩薩をいふ。この四菩薩は釋迦如來最初で、當にお弟子であつてお弟子中の一番貴い方々)これを佛・法・僧の三寶(兼)と云ふ。(後に説く)故に此の十界の曼荼羅を配つて、一度「勸請し奉る南無久遠實成大本尊教主釋迦牟尼佛」と申し上げれば、神佛の根本如來である佛様が、一切の神佛菩薩方を引き連れて其處に、非滅現滅であるから眼には見へぬけれども出ま

しになるのである。この場合は國祖天照大神、八幡大菩薩を始め諸天善神が凡て御出ましになる、(天照

八幡大菩薩等は國を護る國ツ神、宗教の如來は救ひの神にして宇宙の神である。)

### 法華經には

我レ常ニ此ニ住スレ共、諸ノ神通力ヲ以テ顛倒ノ衆生ヲシテ近シト雖モ而モ見ヘザラシム。

と、又日蓮聖人は

譬ヘバ頭ヲ振バ髮ニルグ、心ハタラケバ身動ク、大風吹バ草木シヅカナラズ、大地動カバ大海サハガシ、教主釋迦如來ヲ動カシ奉レバ、ユルガヌ草木ヤ有ルベキ、サハガヌ水ヤ有ルベキ。

と、仰せ玉ふて統一的大本尊をお示しになつたのである。この御本尊こそ、吾等衆生の尊敬し歸依し渴仰し奉るべき御本尊である。

### (二) 本門の題目

本門の題目とは、法華經本門に示されたる妙法蓮華經と云ふことである。壽量品に、色香美味ノ藥草ヲ集メテ、搗糲ヒ和合タ大良藥

トシテ、今留メテ此處ニ置ク、汝等取ツテ服スベシ、苦惱ヲ除クデアラウ。

と、あるのがそれである。で今之れを平易に説いて見れば、前段で明す所の本尊としての救ひの如來が「救ひの手として説き玉ふた教法」を言ふのである。その教法の内容は先づ第一は吾等人間は何んなものであるか、と云ふ點を明すのである。小乗教では吾等衆生は煩惱のカタマリ罪障の結晶だと説かれたのであるが、法華經では先きにも言ふ如く、此説を打破つて十界互具と言つて、佛の因即ち其根本人格は佛と同一價値のものである、と説くのである。(唯面注へる者と悟つた方) 則ち法華經の立場は、佛と衆生との關係を、父子の關係になつて居ると説く。吾れ吾れは本から如來の愛子であつたのであるが、不孝の罪に依つて父を忘れてゐたのである故に、「自分は如來の御子である」と云ふ自覺を持たねばならぬと教へる。其處でこの自覺が出て來たならば、更に

以上を専門的な言葉で言へば、一、人身觀・二、佛陀觀・三、宇宙觀、この三ツを説いたものが妙法蓮華經の内容であると云ふことになるのである。故に吾れ吾れが朝夕南無妙法蓮華經と口に唱へるのは、之等の教を持ち奉る相を一ツの宗教的容に依つて示したのであり、菩薩行として他の爲に働く方は、道德的方面に於て其形を示したものである。

### (三) 本門の戒壇

本門の戒壇とは、法華經本門の教旨に基いて樹てられたる「信仰修行上の規則」といふ事である。一體この戒には「戒法」と「戒壇」との二ツの意味があるもので、戒法と云ふ場合は、精神的に云ふ規律とか法則とかを指す、即ち「正法正師ノ正義ヲ信ジテ邪法邪師ノ邪義ヲ捨テル事」である。所が戒壇となると實際上の「如來の教を持つ場所」を云ふのである。普通お互ひが信仰を捧げるのに、先づ佛壇を安

此度は自分の進むべき方向目的が定つたのであるから、その目標に向つて進む、則ち信仰の生活へ這入つて來ることになる、之れを修行と云ふ。この修行に二ツの方面があつて一ツを自分の爲(自分の爲とは、感謝する願望成就の意味、自分の向) 二は化他と云つて人の爲にする事である。この信仰修行の相を佛教では菩薩行といふ、(菩薩行とは、原則としては、上に教を求め、下に衆生を化すしと云ふ事になつてゐる。) 斯の如くして進んでこそ始めて日蓮聖人が觀心本尊抄に釋尊ノ因行果徳ノ二法ハ妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス、我等コノ五字ヲ受持スレバ自然ニ彼ノ因果ノ功徳ヲ讓リ與ヘ給フナリ云云

と、仰せらるゝが如く吾等は其の目的を成就する事が出来るのである。是れを一言に妙法蓮華經と言つたのであつて、妙法蓮華經とは、だから實行を教へたもので、大聖人は常に「事行の南無妙法蓮華經」と云はれて居るのはそれが爲である。(南無とは歸命と云つて、命にカケて如來の教へた守ります、と誓ふ言葉である。)

置し、本尊をお祭りして香華茶菓等を供へ、燈明を點して端坐し法味を受持する之れを云ふ。そこで此の戒法には事戒・理戒と二種あつて、事戒といふ方は主に小乗教などで言ふ五戒十戒或は二百五十戒と云ふ細かい規則を樹て、一々面倒に何々をしてはならない、何々を食つてはならないと云ふのであるが、法華宗では(實大乘教) 理戒と云つて其等の中の根本戒と言ふか「正法ヲ深ク信ジ持ツテ堅ク謗法ヲ嚴禁ス」と云ふのである。迷信雜信を誡めて本門の大本尊に絕對信仰を捧げる事である。これは尤も大切な事である、お互ひ信仰生活をする者は是非守らねばならない大規則である。故に之れを古來「第一義戒」と稱して、皆命に懸けて守つて來たのである。其の實例は即ち大聖人を始め、先師先哲が身誦法華と云つて、法難迫害に堪へて居られるのは即ちその姿を示されたものなのである。以上此の三が一致し調和した處を本宗の宗旨とするのである。

# 開目鈔講話

(第十四講)

小林 一郎

この間は、法華經の本門壽量品の所謂久遠の本佛といふ、根本の佛様のことが明になつて、初めて一切の教がその精神を得るのであるといふところを讀んで居りました。それで天台大師の言ふ「一念三千」といふやうなことも、本門の壽量品の佛様といふことが解つて初めて本當に解る。それでなければ吾々が皆同じやうに佛性を持つて居るのは何故であるか、又方便品の中で説かれてありますやうに、總ての佛の説かれる事は結局一つだといふやうなことも、何故一つかといふ根本の問題がマルで解からな

い。ところが壽量品に至つて、本の佛は一つだ、その一つの佛の力が現れて總ての佛ともなれば、又それが現れて吾々の持つて居る佛性ともなるのだといふ根本が明になると、成程同じ一つの力の現れたものであるからして、その力と力とが相應するといふことも不思議がない。斯ういふことになつて、初めて天台大師の言ふ一念三千といふことが納得が行くのでありますから、その事を此の前の所で言つて居られたのであつて、日蓮上人は始終そのことを言はれるのであります。どうしても土臺が解つて居な

いといけない。入り口の方で言ふと、皆どれでも似たやうなことを言つて、大乘の經典の中に人間が佛になれるといふことを言はない經典は殆どない。だから大體だけ言へば皆どのお経でも同じやうです。併し何故佛になれるかといふことを段々押つめて行きますと、根本の佛が一つだから、その一つの力の現れた各部分であるが故に皆本の力に依つて佛になれるのだ、斯ういふのでなければその議論といふものが徹底しない譯です。その所をこの間言つてありましたが、尙ほこの先にもさういふ議論は出て参ります。

かうてかへりみれば華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等、般若、金光、明經、阿彌陀經、大日經等の權佛等は、此壽量の佛の天月、しばらく影を大小の器に浮べ給を、諸宗の學者等、近くは自宗に迷

ひ、遠くは法華經の壽量品をしらず、水中の月に實月の想をなし、或は入て取んとおもひ、或は繩をつけてつなぎとゞめんとす。天台云く、天月を誡らずして但池月を觀る等云云。

さういふ風になつてこの壽量品の意味が解つてから「かへりみる」他のお經にある佛様のことを較べて見ると、佛様の尊さといふものは決して變りはないけれども、その尊い佛様といふものは、結局壽量品の中に説かれた「如來の秘密神通の力」と仰しやつた、その如來といふ根本の佛様の現れたものに過ぎないといふことが明になつて來る。例へて言へば華嚴經に於ては「臺上」といふことと「十方」といふこととある。これは十方の世界に澤山の佛様が出られて、その佛様がそれ／＼教をお説きになるその澤山の佛様はもと／＼何處から出たかと言へば

——臺上といふのは「蓮華臺上」といふことを略したのでありますが、中央に佛様があつて、それが斯ういふ風に現れて方々の佛様になつたのだといふ思



想であります。これはこの世界だけではなく、十方の世界に色々な佛様があつて、その佛様が皆一々尊い教を説いて居らつしやる。その佛はもと／＼どうして出来たのかといふと、中央に總ての佛様の根本であるところの佛様がある、それが華嚴經で言ふと釋迦牟尼佛。その釋迦牟尼佛が、蓮華臺上——丁度蓮の華があつて、その真中に芯があるやうに、總ての佛を統一する地位に居らつしやつて、さうして永遠の命を具へて居らつしやる。その蓮華臺上の釋迦

牟尼佛、即ち總ての佛を統一する地位に居らつしやる釋迦牟尼佛の力の現れたものが、十方の世界の色々な佛だといふことを言つてあるのであります。ですから華嚴經だけを見ますと、如何にも華嚴經に言はれた佛といふものが根本の佛といふやうに見えるのですけれども、華嚴經に於ては、法華經の壽量品のやうに久遠の命といふことを言つてない。總ての佛が釋迦牟尼佛の現れだといふところまでは言つて居るけれども、その釋迦牟尼佛が壽量品にあるやうに永遠の、昔からの一貫した命を持つたお釋迦様だといふことにはまだ説き至つて居ない。その所に違ひがある。大體は華嚴經の中に説かれたのでも、諸佛は一佛の力の現れだといふことまでは説いてある。マア似たやうなものだと思ふ人は、それで同じだ、斯う言つてしまふのでありますが、唯久遠の命といふことを、壽量品ほど明に説いて居ないのであります。併し兎に角華嚴經の中にはさういふ風に

十方の佛が要するに釋迦一佛の現れだといふことはある。

それから阿含經といふのは、これはモウ小乗の教でありますから、お釋迦様といふのは出家をして修行をして、それから覺をお開きになつて後に教をお説きになつた、さうして説くべきだけを説いてしまへばこの世を去つて行かれる佛様だ、斯ういふことになつて居るのでありますから、これはお釋迦様としての本當のお働きの一部分だけしか阿含經には説かれて居りません。「小釋迦」といふのは、お釋迦様はつまらないといふことではない、お釋迦様の一部分を現はしたものに過ぎないといふ意味であります。一體お釋迦様といふことを小釋迦とか大釋迦とか書いてあると、つまらないお釋迦様と立派なお釋迦様とあるやうに思はれるのですけれども、決して佛様につまらない佛と善い佛とがある筈はないのであつて、「小」といふのは一部分の力の現れるとい

ふ意味、「大」といふのはその全體の力の現れるといふ意味であつて、佛様が幾種もあるといふのではない。衆生の方が違ふのです、或る時は一部分だけを認めて、これが佛だと思ふし、又モット進んだ人になればそれよりモット深い所を捉へて、これが佛様だと思ふのであります。總て佛に對して色々大だとか小だとか、勝れて居るとか劣つて居るとかいふことは、現れ方を言ふのであつて、根本の佛様は壽量品にあるやうに一つきりしか無いのでありますから、その所を間違はないやうにしなければならぬ。日蓮聖人の始終言はれるのはそこであります。どう云ふ風になつて現れて居るか、もと／＼根本は壽量品にある佛様だけしかないのでありますから、それがどう現れるか、その現れ方に依つて、その佛の一小部分が現れることもあるし、大部分が現れることもあるし、色々ありますから、そこで色々大小等の區別が立つのであります。そこで阿含經といふ

のは小乗の教でありまして、小乗の教をお説きになつただけをお釋迦様とするならば、そこに現れたお釋迦様といふものは釋尊のお力の一部分に過ぎないそこでこれを「小釋迦」と言つてあるのであります。それから又方等、般若、金光明經、阿彌陀經、大日經といふやうな經にも色々それらの佛様が現れた。或は釋迦牟尼佛であるとか、大日經であれば大日如來といふやうな佛様が現れて居るのであります。それは方便の教を説かれただけの佛であり、ますから「權佛」です、權といふのは方便です。方便の教を説かれるだけの佛様、斯ういふものは、壽量品の中にある如來祕神通の力と仰しやつたその如來といふものに較べて見ると、天の一つの月が大の器にその影を浮べたと同じことである。即ち壽量品にある如來といふのが天の月のやうなものである。根本のものである。それが彼處の海、此處の河、或は色々な器に盛つてある水に影を現はすやうに、

或る時は大日如來といふやうな佛となつて教を説かれる、或る時は阿彌陀如來といふものになつて教を説かれる、或る時は又他の色々な阿闍佛でありますとか、藥師如來であるとか、斯ういふものになつて教を説かれた。それはその場合に依り、その處に依り、その人に依つて様々な教が與へられる。併しそれは彼處の海にも此處の河にも月の影が映ると同じことなのであつて、押しつめて行けば根本の月に當るところのタツタ一つの佛様がなければならぬ、それが壽量品に説かれてあるのであります。その天の月に相當するところの壽量品に現れた佛様が暫く影を大小の器に映して、さうしてその場合に適當な教を與へられる、斯ういふことである。此に至つて佛敎全體の統一が付くのであります。それを色々な宗の學者達は、近くは自分の宗に迷つて居る。銘々或は淨土宗だとか、眞言宗だとか、色々な宗旨に立つて居るものでありますから、その

宗に執着をする。一度その宗に屬した人は、何とかして自分の宗を維持して行きたいといふやうなことで、そこに私の心持が入るものでありますから、どうも本當のことが解らなくなつて居る。人間はどうも執着がある、これは仕様がな、中々除きにくい。金が欲しいとか、位が欲しいといふことだけが執着ではない、一旦自分が習つて覺えて居ると、これを一番良いものにして置きたい、これより上手のものが出て来るのは甚だ不愉快だ、斯ういふ心持になる、これを法執と言ふ。「法執」といふものと、「世執」といふものとある、世執といふのは世間の執着で、普通の金が欲しいとか、位が欲しい、或は一度酒んだものは離さないといふのが所謂世間の執着です、これは誰でもある。ところが信心をする人には法執といつて、法の執着といふのがある。「自分は一且阿彌陀様と決めたのだからどうしても阿彌陀様だ」「自分は一旦釋迦様と決めたのだからどう

してもお釋迦様だ、モウ一旦決めたのだからこれは變へない」……それは悪い事ではないが、それが間違だと判りかけても「何とかして噓り付いて居よう」斯ういふのがある、それが法執といふのであります。それが多いから宗旨の争ひなどが餘計盛んになつて来る。モウ捨てるのが嫌だといふ、何が何でも嫌だといつて、お互ひに執着をして居るのであります。それを今茲に日蓮上人が指摘して居る。皆俺は何宗だ、彼宗だといふやうに自分の宗旨に執着してしまつて、それが間違だと判りかけても、その間違つたといふ方を胡麻化してしまつて、飽くまで自分の今まで執り來つたものを固執しようとする、斯ういふのが随分世の中に多いといふのであります。日蓮上人は三十二歳までの研究の結果として、法華經が最上の經だと信じて、これを弘める爲に力を盡されたのでありますけれども、若し自分の言つて居ることが間違だと明にする人が出て來れば、何

時でも自分はこれを捨て、も宜いといふことは言つて居られる。この「開目鈔」を読んで行くと後の方にあります。「智者に我が義破られずば用ひず」智慧のある人が出て来て自分の主張を打破れば、その時は何時でも降参して説を變へる、併しさういふ人が出ない限りは、道理の上に於て自分の言ふことが間違つて居ると判らなければ、政治上の壓迫をしたり、それから武力を以て迫害するとか、ソナナこと位には自分は驚かない。だから自分が若し降参する時があれば、自分の信心して居ることが間違つて居るといふことが明にされる時だ、斯う言つて居られるのであつて、日蓮上人はチツトモ執着がないのであります。ところがどの宗の人でも、どの經の人でも、日蓮上人を屈服せしむる人が出て来ない。それだからこの法華經を生涯信じ續けられたのでありまして、決して一度法華經が善いと思つたから、悪くなつても何でも噓りついて居る……といふやうな

ソナナ所謂法執は日蓮上人にはないのであります。そこは非常に大事なことです。吾々も色々な人の説を聴いて、又書物などを讀んだり何かして、法華經が一番善いと信じて居るので、「一旦法華經が善いと思つたから行懸り上やるのだ……」といふ積りではないのであります。それではいけない、一切の執着を捨てなければいけない。本當に一番善いものを信ずるといふのでなければいけない。今後に於てもさういふ心持は變へないやうにしなければいけないと思ふ。動もすると自分の宗旨に執はれ易い。そこで世間の人は近くは自宗に迷ひ、自分の宗旨に執着するのでありますから、本當のことが判らない。であるから遠くは法華經の壽量品を知らない。法華經の壽量品といふものがどういふ深い意味のあるものかといふことを知らない。それは讀んだ人はあるでせうが、唯一通り讀んだのではこれは解らない。それで物事を知るといふことは、知り分けること

でありまして、一つだけ見たのでは判らないのです。どれが良いのだから較べて見ると判る。先程申上げたやうに、華嚴經などでも一切の佛は一つの釋迦牟尼佛の現れだといふことを言つて居るが、壽量品に較べて見ると、壽量品には久遠の命といふことが説いてあるから、此處が違ふといふことが判る。較べないで唯一つだけ見て居たのでは、それが果して優れて居るのか居ないのか判らない。そこで天台大師でも日蓮聖人でも、その所を色々苦心をされて、種々な經を披いて較べ合せて、然る後に法華經が勝れたものだといふ結論を得られたのであります。私は英吉利で聞いたのですが、英吉利の古い諺に、「一つの國語を知る者は一つの國語も知ならない者だ」といふことがある、これは面白いと思ふ。例へば英語なら英語だけ知つて居て、他のものと較べないと英語が善いか悪いか判らない。佛蘭西語なら佛蘭西語だけ一つ知つて居て、他のものと較べないと、佛

蘭西語が善いか悪いか判らない。英語と佛蘭西語と獨逸語といふやうに較べて見ると、そこで初めて英語なら英語の特色が判り、佛蘭西語なら佛蘭西語の特色が判る。だから一つの國語だけしか知らない者は、結局どの國語も知らないものだといふことを、英吉利の諺で言つて居るのであります。私なども廣く外國を歩いた譯ではありませんが、外國を歩いて見ると、日本の國は斯ういふものだなといふことが能く判ります。だから日蓮上人が二十年の研究を積まれたといふことは、實に貴いことでありまして、一切の經典、一切の教義を較べられた上に於て、法華經が最も勝れたものであるといふことを決めたのであるから、これは中々動くものではない。それで甚だ餘計なことも言ふやうですが、あなた方でも私共でも、互ひに若し疑が起きたら、疑と妥協をしてはいかぬ、妥協といふことは一番いけないことです。』どうも

法華經が良いと言つて居るけれどもどうかナ、他に良いのがあるはしないかナ」といふやうな疑が起きた時に、「マア／＼ソナナことは良い加減に揉み潰してしまつて、家は代々法華だから法華にして置かう」といふやうなことであつては、所謂天台、傳教の精神にも背くし、日蓮聖人の教を立てられた趣意にも背くのであります。妥協はいけない、この世の命だけの問題ではない、永遠の命を決定する問題でありますから、良い加減に妥協して、判らないが判つた積りにして置かうといふのではない。その所の所をシツカリして置かなければならない。そこで日蓮上人が始終そのことを言つて居られる。俺は何宗だからといつて宗に執着してはいけない、佛様の本當の御精神を捉へるやうにしなければならぬといふことを言つて居られるのはその爲であります。それで諸宗の人はさういふ所に眼が着かないで、壽量品の本當のことも知らないものだから、丁度水の中

にある月を見て本當にそこに月があると看做す。或は甚しいのになると水の中に入つてそれを取らうとする。猿が水に映つた月を取らうとしたといふ話が支那にあります、ソナナやうな人もある。或はモット甚しいのになると、水の中にある月を縄で縛つて繋ぎとめやうといふやうなことをするのであります。そのことを天台大師が批評して「天月を識らずして但池月を觀る」天の月を知らないで池の月ばかりを見て居るので、洵につまらない。斯ういふことを言つて居られるのであります。

日蓮案じて云く、二乗作佛すら猶爾前つよにおぼゆ。久遠實成は又になるべくもなき爾前つりなり。其故は爾前法華相對するに猶爾前こわき上、爾前のみならず、迷門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出壽量の二品を除ては皆始

成を存せり。

併ながら奈何せん、多くの人の考は兎角多數決に傾くものであるといつて、これからその批評をして居られるのであります。多數決を喜ぶといふことは今の世に始まつたことではない、昔から多數決を喜ぶのです。大勢が良いといふことが良いと言ふ。澤山の書物に書いてあることは本當だ、斯ういふやうなことは人情なのです。それを言つて居るのです。二乗作佛といふことでも、これは法華經にだけ言つてあることで、他の經に言つてないから、法華經以前の方がどうも本當だらう。法華經一つに聲聞緣覺でも佛に成ると言つてあつても、どうもこれは一つのお経だから、澤山のお経に聲聞緣覺が佛に成らなると言つてあるから、それが結局本當だらうといふことを考へられ易い。さういふことをこれから言ふのであります。大變に餘計なことを言ふやうですが

一體多數決に疎なものはない。世の中は何時の場合でも、大勢が寄つて決めたことに善いといふものもあるものではない。けれども何だかチョット見ると十人の中で八人まで賛成すればそれが善いことのように見える。大概多數決で決めたことは後悔がある本當に頭の良人がシツカリと考へて決めたことが善いのであつて、多數の人が決めても、判らない人が決めたなら判らない。この間も私は學校で學生に言つたのですが、君達が田舎から出て来て大勢でクラスの間を何處でやるかといつて幾ら相談しても判らないだらう、東京の様子が判らないのだから、結局小川町邊りの間口の廣い牛肉屋で不味い牛肉を食べさせられる。やはり東京に精しい人の話を聽かなければならん、大勢の意見よりも一人の東京の人の意見を尊重しなければならん、それは一人でも千人より尊い。その所を考へないで何でも大勢で、多數決でやらうとすれば本當のことは決まらない、世間



の事でもその通り、況して佛敎の事などは、所謂ワ  
イワイ言ふ連中が幾ら大勢寄つて決めたところで、  
それは洵に愚かなことだ。本當の智者の魂を打込ん  
だ一つの言葉は、千萬人の人の言葉より値打を持つ  
て居る、その所は能く考へなければいけない。經  
典でもその通り、ドンナに經典が澤山あつても、お  
釋迦様が方便にお説きになつたのと、お釋迦様が本  
當に自分の魂を打込んでお説きになつたのでは、  
同じお釋迦様のお言葉でも深さが違ふのでありまし  
て、その浅いものが千萬巻あつても、その深いもの  
の一つに及ばぬといふことは無論考へなければなら  
ぬのであります。さういふやうな所は餘程シツカリ  
と考へなければいけない。

これも序でに言ふのですが、お釋迦様に方便と眞  
實の説のある如くに、日蓮上人だつて誰だつて、方  
便と眞實の敎があることを考へなければならぬ。相  
手が子供なら子供のやうに話し、相手が愚かな者な

から、その所を捉へてこれが本當だと言つては飛  
んでもないことになるのであります。何時でも能く  
深い所を考へて、さうして眞實の所を捉へて行かな  
ければならぬ譯です。

今こゝにはそれを言ふのです。「二乗作佛」聲聞  
でも縁覺でも段々進んで菩薩の行を積めば佛に成る  
といふやうなことも、法華經に來て初めて打明けら  
れたことで「爾前」即ち法華經以前のお經にはない。

それで法華經以前の經が澤山多いから、その前のお  
經の方に負けさうになつて來る。多數決で言へば法  
華經以前の經が多いからさうなる。況して「久遠實  
成」といふやうなことは、永遠の命を持つた佛様が  
娑婆世界に釋迦牟尼佛となつて現れて居らつしやつ  
たといふやうなことは、これは他に類のない事であ  
る。法華經と他の經と較べると、その以前の他の經  
には數では及ばない、前の方の種々なお經の中では  
お釋迦様といふものは五十年の説法を終つて、八十

ら愚かな者のやうに話す。例へば日蓮上人の御書を  
讀んで、「同じ日蓮上人の書かれたもので、此處に  
は斯うある、此處には斯うある」と言つたら、矛盾  
だらけ、衝突だらけ、それは仕方がない。それを淺  
はかに敎を弘めようとする人は、一番知識の足らな  
い者に聖人のお書きになつたお手紙などを持つて來  
て、「御書に斯うあるからこれが本當だ」といふや  
うなことを言ふのであります。これは愚かなこと  
であります。佛に方便の説のある如くに、日蓮上人  
にも方便の敎と眞實の敎とがあるから、本當に魂を  
打込まれたのは何處かといふことを見究めて、それ  
に依つて信仰をしなければならぬ。それを方便の一  
時の敎に執着すると飛んでもないことになるに相違  
ない。このことは特に日蓮上人の敎を信ずる人には  
注意して貰ひたいと思ふ。日蓮上人も時に依れば相  
手に依つて、マア他日深い敎を興へようと思はれて  
も、一時は極く淺い敎で満足されることもありませ

にして御入滅になる佛様だといつてある。數に於て  
は法華經以前のお經には及ばないのであります。そ  
れだから餘程シツカリ考へなければいけない、頭が  
悪くては仕様がな、唯何でも澤山あれば本當だと  
いふやうな考ではいけない、シツカリ考へなければ  
いけない。斯ういふことを言はれるのであります。

「其故は爾前法華相對するに猶爾前こわき上」

こわいといふのは多數で言ふから恐ろしい。又法華  
經以前の方ばかりか、法華經の中に入つて來ても、  
「蓮門十四品」即ち序品からして安樂行品に至るま  
でのこの十四品の中に於ては、やはりお釋迦様が永  
遠の命を持つた佛様だといふことは言つてない。お  
釋迦様に就ては、やはりこの娑婆世界に出て御修行  
になつて、お覺りになつて敎をお説きになつたのだ  
斯ういふことになる。であるからこの點に於ては  
「爾前に同ず」法華經以外の經と一致して居るやう  
に見える。ところが本門十四品でも、涌出品と壽量

品の二品を除いては、お釋迦様の命が永遠の命だといふことは言つてない。このことは非常に大事なことです。一番大事なことをさう度々言ふものではないのです。一體方々に言つてあることが本當だといふことを考へるべきではない。一番大事なことは、大事な時に一度か二度チャント言へば宜いのだ。それを度々言はなければならぬといふのはいゝ加減なことです。それを幾度も言つてあるから本當だと思ふのは飛んでもない根本の間違なのであります。だから久遠の本佛が釋迦牟尼佛となつて娑婆世界に現れて、娑婆世界に永遠に居らつしやる。此處に居らつしやる釋迦牟尼佛は、モウ涯もない昔からある佛様の力の現れだ、斯ういふ意味は、これは法華經本門と言ふけれども、本門の中でも今此處にあるやうに、涌出品と壽量品だけにしか言つてない。極く稀に言つてある、タツタ二度しか言つてない。だから多數決流の人から言ふと、タツタ二度位しか言つて

ないからこれはいゝ加減のことだらう、幾度も言つた方が大事なことだらう。斯ういふやうな考へを起す併しこれは極めて間違つたことであります。私は何時でもこのことを極く俗な例で言ふのです。出納帳とか簿記の帳面などを見ると書いてある。銀行の通帳でも宜しいですが、幾ら入つて、幾ら出て、幾ら残つてと書いてある。これを途中で幾ら見てもつまらない。一番終ひの所を見なくてはならぬ。終ひの所で、例へば大晦日になつて、一體銀行に幾ら預けて、幾ら引出して、幾ら残つたのだといふ一番終ひの帳尻といふものが、その年の會計の全體です。それを途中で見て、今月一萬圓残つたといつても、年末になつて皆出してしまつたら、途中は一萬圓でも大晦日には零です。「六月には一萬圓あつたのだが」と言つて見ても仕様がなない。これは極く俗な譬ですが、段々勘定してどん底は帳尻に現れる、それと同じです。佛様が色々お説きになつて、結局の所

は最後にハツキリ言はれて居る。帳尻は幾度も出さない、幾度も出しては帳尻にならない。教といふものは丁度それと同じで、一番大事なことは唯一箇處に於てハツキリ言はれる、ソナナことは幾度も言はない。そこを間違へて行くと、所謂多數決になつてしまつて、アツチにあつたりコツチにあつたりすることが皆本當だと思つてしまふ。斯ういふことになつてありまして、これは極く俗な譬であります。が、私はさういふ風に考へなければいけないだらうと思ふ。要するに大事な所を捉へなければならぬ。枝葉の所を捉へて居つては本當の信仰は確立出来るものではない。その意味を此處では丁寧には言はれて居る。法華經の本門といつても、本門の中の涌出品と壽量品の中にのみ、本當に永遠の命を持つて居る佛様といふことが説かれてあるのであります。

隻林最後の大涅槃經四十卷、其外の法華

前後の諸大乘經に、一字一句もなく、法身の無始無終はとけども應身報身の顯本はとかれず。いかに廣博の爾前、本迹涅槃等の諸大乘經をばすて、但涌出壽量の二品に付べき。

それから隻林最後の大涅槃經、即ち沙羅雙樹の下でお釋迦様が御入滅する前にお説きになつたことを書留めた涅槃經、これは全部で四十卷もあつて大變多いけれども、その中に於ても今の久遠の本佛が釋尊になつたといふことは言つてない。それからその他の法華以前、或は法華以後の色々な大乘の經でも一字一句も壽量品にあるやうな久遠の本佛といふことは言つてない。勿論「法身の無始無終はとけども應身報身の顯本はとかれず」此處が大事な所でありませう。法身の無始無終、これは説いてある。法身といふのはつまり佛としての本性です、佛としての本

性は、これは如来藏といひ、法性といひ、佛性といひ、眞如といひ、種々な言葉で華嚴以來ズット説いてある。これはこの世の中の今始まつたものではない。又佛の智慧が成就し、慈悲心が得られて居るといふことは、三十年や五十年の修行で出来たものではない。佛の本性といふものは永遠のものだといふことは、華嚴であらうが、般若であらうが、何處であらうが説いてある。ところがその永遠の命の佛が修行をして覺を開いた、所謂「應身、報身の佛」智慧の佛として現はれ、又一切の衆生を救ふ慈悲の佛として現れた、この智慧を成ずるといふことと、慈悲の行を行ずるといふことと、今の永遠の命の佛の本性といふことが、一貫して説かれたといふ所がない。ところが宗教として大事です。目の前に娑婆世界に出て來られたお釋迦様は、修行をして智慧を成就されたお釋迦様、所謂應身だ。さうして又一切の人をお救ひになるといふ慈悲の働きをして居らつしや

る、所謂報身である。この應身であり報身であるお釋迦様そのものが、法身であるところの久遠の永遠の佛の現れたもので、これは續きなのだ、違つたものではない。此處を捉へなければ何にもならない。それが法華經の大事な所です。たゞ唯一の佛を説いてあるといふのなら、大日經に就て見れば大日如來が唯一の佛様、それから華嚴經に従へば毘盧遮那佛が根本の佛である。阿彌陀佛といふものも、解釋の仕様に依つては無量壽といふのだから、やはり永遠の佛だといふ解釋も出来るのである。若し唯一のものであつて宜いのなら、耶蘇教で神様といふのも絶対であり、支那の哲學者のいふ天といふのも、西洋の哲學者のいふ本體とか實體とかいふのも、皆唯一絶対のものである。根本の一つのものを立てるのは難かしくない、至る所で言つてある。唯その根本の一つの佛様といふものと、智慧を成就し慈悲を行ぜられたお釋迦様とが一身同體であつて、これが續

いて居るものだ。そこを捉へなければならぬ。それで見れば信仰は確立しない。何だか雲の上にある月を見て居るやうなことになるのであります。法華經は非常に有難い／＼と言つても、そこを捉へなければ法華經の有難さは本當に判るものではありませぬ。最も手近い自分の目の前の佛様と、最も遠い永遠の佛様とが一つだ、續いて居るのだ。その所を説いた所に法華經の大きな力があるのであります。それは吾々が幾度言つても言ひ盡せないものであります。それを捉へないから弘法大師の言ふやうに『理同事勝』といふことが出て來る。理窟を言へば同じだ、毘盧遮那佛でも一つの佛様のことを言つて居るし、大日如來といつても一つの佛様のことを言つて居る。マア理窟は同じ、似たやうなものではないかといふ議論が起る。本當の所を捉へないで、唯理論の方ばかりに趨るやうになつて行くのであります。これは不思議がない、今の色々研究をして居る

人でもさういふ風に言ふ。「モウ大概似たやうなものではないか、ナニ儒教でも、佛教でも、カントの哲學、ヘーゲルの哲學でも大體根本の所を言つて居るのだから、自分が考へて見て良い所だけ取つて、役に立つ所だけを信じて行けば宜い」といふやうな議論をする人もある。それは宗教としての本性を知らないからさういふ議論になるのであつて、宗教としてはどうしても吾々娑婆世界に生きて居る者が、この娑婆世界に命を持つて現れた釋迦牟尼佛と、永遠の命を持つた佛と同じであるといふ根本を捉へないで、自分達の信仰の土臺が確立するものではない。これは餘程重大な問題であります。それを時々日蓮上人が色々な御書の中に言つて居られるのであつて、此處でもその問題を言つて居られます。法身、應身、報身、即ち釋迦牟尼佛となつて現れた、その釋迦牟尼佛の根本が壽量の本佛であるといふことは法華經以外に於て餘り説かれて居ない。であるから



うとしたら、その人のことを本當に知らなければ救へるものではない。丁度譬へて見れば、人の病氣が判らないで出鱈目に薬を飲ましてやるやうなもので、親切は親切でも、病氣に合はない薬を飲ませれば病勢が進むことになる。どうしても吾々が世の中に立つて本當に人を救はうとするならば、諸法の實相を知らなければ駄目です、知らないで救ふことは出来ない。その所はやはり大事なことであると思ふのです。昨日も人が来てソナナ議論をしたのですが「命懸けてやつたことは皆尊い」と其人が言ふので、私は「そんな馬鹿なことはない、命懸けてやつた事はチツトモ尊くはない、何の爲にやるのだといふ事が明にならなければ駄目だ」「兎に角命懸けてやつたら尊い」と頻りに言ふので、「それなら電車の後を追駈けて息が切れて倒れてしまつたのはどうだ、やはり命懸けて追駈けたのだが、電車を追駈けたつて何にも役に立たないぢやないか」と言つた

のですが、さういふやうなもので、唯命懸けてやつてもチツトも尊くはない。本當の事に命懸けてやつて初めて甲斐がある。そこで諸法の實相を知らなければならぬ。物の本當の姿を知らなければならぬ。これは苟も大乘の教を學ぶ者は心得なければならぬことでありまして、この言葉は確に良い言葉です。それから法相宗に於ては「瑜伽論」といふものを重んじます。瑜伽といふのは「相應」といふ意味です。相應といふのは、吾々の毎日身に行ふこと、意に思ふこと、口に言ふこと、所謂身口意の三業、この三業が正しき理、正しき道と應じなければならぬ、斯ういふことを言ふのが相應といふことです。瑜伽といふ言葉も善い言葉であります。吾々は何を言ふか、ドンナ行ひをするか、何を考へるかといふことは、皆正しい道に應ずべく、一致すべく努めなければならぬのでありますから、瑜伽といふ言葉も随分善い言葉であります。この瑜伽論といふものを

又本にして居ります。

それからモウ一つは「唯識論」これは印度にもありますが、唯識論といふのはつまり心の持ち方に依つて一切の境遇が決まるといふことであります。識といふのは心の働き、心の働きの根本だ。これを本にして人間の心の色々な移り行きを詳しく調べて説いたのが唯識論であります。つまり人間の色々な精神作用の根本の説明であります。この唯識論は中々面倒なものであります、實に能く調べてあるのであります。

此の解深密經、瑜伽論、唯識論、この三つを本にして立てたのが法相宗でありまして、その名前は解深密經の法相品に基いて居る。だから組立は先づ良いのです、どの宗でも苟も大乘の宗として榮えて行く爲には、土臺がグラ／＼して榮える譯はない。そこで根本を言ふと佛様の問題になるのであります。日蓮上人はそのことを言つて居る。色々の宗がある

が、その本尊がどうもシツカリしてない。壽量品にある本佛のやうな根本の佛がない。さういふシツカリしたものがないからいかにぬのだが、色々な枝葉の問題で言へばどの宗でも皆相當に善いことを言つて居るのであります、それは認めなければいけない。それで法相宗といふのは大體さういふやうな宗なのであります。

法相宗と申す宗は、西天の佛滅後九百年に無著菩薩といふ大論師、論をつくる上に於て非常に勝れた方が居らつしやつて、夜は都率天に行つて彌勒菩薩に會つて教を聞いた。それは毎晩靜かに考へると、天上界に上つて彌勒菩薩に會つたといふ自覺が起きて来る。それで自分は獨りで考へたのではない、彌勒菩薩に會つて、彌勒菩薩の精神を自分は傳へるのだ、斯ういふやうに言つて居る。晝は阿輪舍國、これは印度の一つの國であります、そこで以て法相の法門を弘められた。この無著といふ人が本にな

つて法相宗が印度に出来た。その無著といふ人の弟子の世親といふ人、それから護法、難陀、戒賢といふやうな人は、何れも印度では非常に勝れた人々である。それ、釋尊の教を説明し、研究する上に於て非常に力の有つた人である。それから又印度では戒日大王といふ王が、佛教の保護をする爲に大變に力を添へた人でありましたが、この人が頭をかたぶけて感心しまして、それで印度に弘まつた。それから五天の者が、輪を倒したといふのは降参した意味です。色々佛教の派もありましたけれども、各派の者が皆輪を倒して降参して、さうして法相宗に歸依して来た。それで印度に於ては榮えた。

それから支那の方で言ふと、唐の太宗の時代に玄奘三藏といふ人が、太宗といふ天子の命を受けて月氏にいたり、印度に入りまして、十七年の間印度の方々の百三十餘の國々を歩いて、さうして色々な宗を習つたけれども、他の宗はこの法相宗に及ばぬと

建て、その外三百六十餘箇國に互つて色々澤山の寺を建て、これを弘めました。支那には唐の時代に於てこの法相宗が非常に盛んになつた。

それから日本には人皇三十七代の孝徳天皇の御代に、道慈、道照といふやうな人がこの法相宗を渡しまして、さうして山階寺に於て法相宗を非常に力を盡して弘め、此處が中心となつて日本中に法相宗が弘まつた。であるからマアこれは勢力の上から言へば三國第一の宗と言つても宜い譯であります。その批評はズツト後の方にありますから、此處はこれだけの事實であります。

そこで釋迦様が涅槃經の中に仰しやつた言葉に「法に依つて人に依らざれ」といふことがある。これは簡単な御言葉のやうでありますけれども、實に意味が深い。人に依つてはならない、人に依りますと、つまらない人が勢力を得たり、つまらない人が歸依を得たりすることがあるのでありますから、確

いふ考で、色々な宗をふり捨て、さうしてこの法相宗を自分が信じてこれを支那に渡した。それで時の天子の太宗皇帝といふ王は中々勝れた王でありましたが、この王に法相宗の教義を説いて、太宗皇帝が非常に感心して法相宗に保護を加へまして、皇帝の信仰と、非常な學者である所の玄奘三藏の力と一致しましたから、そこで初めてこれが支那に遍く弘まつたのであります。殊に又玄奘三藏の下には大變勝れた弟子がりましたものですから、その勝れたお弟子の名前をそこに擧げてあります。神昉、嘉尚、普光、窺基、斯ういふ四人の人、何れも日本に於て餘り名の傳つて居ない人でありますから、どうでも宜しい譯ですが、此處にはその名前の半分、一字だけを連ねてあります。斯ういふやうな人が玄奘三藏の教を受けて段々現はれました。これは何れも弟子としては勝れた弟子でありました。それ等の人が力を協せて、さうして支那の都に大慈恩寺といふ寺を

にやはり法に依らなければならぬ。殊に末代の複雑極まる世に生れて居る私共は、人に依つてはならぬのであります。人といふものは色々な智慧のある人があつて、宗教以外に智慧のある人が、その智慧を利用して宗教を弘めれば、弘まることは弘まるのであります。それから、教としては何もないのであります。だからどうしても涅槃經の中にある「法に依つて人に依らざれ」といふことは、何時まで経つても變らないことだらうと思ひます。日蓮上人もそのことは非常に心に懸けて居られるのであつて、この經は非常に盛んになつた、この宗は非常に盛んになつた斯う言つて置いて、併ながらそれは佛の御本意に適ふか適はないかといふことを本にして決めないで、一時盛んになつたからといつてそれに惹かれることはいけないといふことを、始終戒めて居られるのであります。これは餘程氣を付けなければならぬ

ことだらうと思ひます。今の世でもどうも法に依らずして人に依る方が多いのでありますから、兎角正しい教は弘まらなれないといふことになるのであります。この法相宗なども一時の勢力、世間的の勢力から申しますれば、本當に三國第一とも言つて宜しいものであつたのでせう。ところがその中の教義を調べて見ると、法華經の教などはどうしても一致しないものであつて、若し是等の宗が善いといふことになれば、法華經はどうもつまらない宗になつてしまふのであります。そのことをこれから後で段々言つて居られるやうであります。

此宗の云く、始華嚴經より終法華、涅槃經にいたるまで、無性有情と決定性の二乗は永く佛になるべからず。佛語に二言なし。一度永不成佛と定給ぬる上は、日月は地に落給ふとも、大地は反覆すとも、

斯ういふのを所謂「五性」と言ふのであります。一番初めの「定性聲聞種性」といふのは、これも信心しなければ駄目なのであります。信心を勵んで行きさへすれば聲聞といふ位までになれる性質を初めから持つて居る、斯ういふのであります。定性といふのは定まつた性質、定まつた性質の上から言つて聲聞ぐらゐになれるものだ。聲聞といふのは屢々申すやうに、佛の小乗の教を學んで、世の中の無常を感じて世間を離れた清らかな生活をするといふことが主であります。そこまで行ける者がある、それは幾ら修行してもそこまでしか行けない、生れつきさういふ性質を持つて居る、それから縁覺といふのも世の中の無常を感じるのであります。唯佛の教を聞いたゞけでなく、自分の毎日見たり聞いたりする事柄と思ひ合せて、所謂縁に依つて覺る、日常の生活と佛の教と始終思ひ合せて、成程世の中の無常だ、世間の名利の念といふものを捨てなければ

永く改變あるべからず。

それでこの宗で言ふには、始め華嚴經をお釋迦様がお説きになつてから終りに法華經、涅槃經をお説きになつた、それまでの間に、誰でも佛に成るといふものではない。それは佛に成るべき本性を持つて生れた者と、佛に成れない本性を持つて生れた者であるので、その佛に成るべき本性を具へない者は、如何に尊い教があつても決して佛に成るものではないといふことを言つて居るのであります。これは所謂「五性各別」といつて、五性は各々別なりといふことを言ふのであります。

- 一、定性聲聞種性
- 二、定性緣覺種性
- 三、定性菩薩種性
- 四、不定種性
- 五、無性有情

ばならぬといふことに氣が付いて、清らかな生活をするといふ所までは行けるのであります。それが「定性緣覺種性」であります。それから「定性菩薩種性」これは一番良いのであつて、修行の仕方に依つては大乗の教が能く判つて、所謂菩薩の行を勵んで結局佛に成れる、だから佛に成れるといふ者はこれだけしかない。さういふやうな者もある、それは確にある、それから「不定種性」といふのは決まらない。性質だけでは決まらない、これは修行の仕方次第で、淺く修行すれば淺い所で止まつて居るし、深く修行すれば大乗まで行ける。天性に依つてはドツチにも決まらない。併ながら決まらない者の大部分は、大乗の修行は出來ないで終るだらうと説いてある。中々色々な道が明けてありまして、非難がないやうになつて居る。それから「無性有情」無性といふのは佛に成るやうな性質はない、情といふのは當り前の感じ、感じだけはある。だからこの一番最

後の者は逆も佛の教などは判らないから、マア行ひを慎んで世間に煩ひをかけない程度にこれを導くより外はない。逆も佛の永遠の命、ソナナことは判らない。斯ういふ者は唯世間の邪魔にならない程度に悪い者にならない程度にこれを教へ導くより外はない、さういふ者もある。斯ういふやうに五つを申すのでありまして、この五つの者は各々別であるからその天性を如何とも變へる譯にいかないといふのが法相宗の議論であります。

これはマア法華經などのやうに、佛様が自分と同じものにしてやらうと仰しやつたり、涅槃經のやうに、一切衆生悉く佛性が有ると言ふのとは、その精神は一致しないのであります。併ながら斯ういふ教が何故弘まるだらう、そこが考へ物であります。これは人情です、私共は可なり永い間法華經をやつて居るのでありますから、ソナナ臆病なことを言つては濟まないけれども、時々「佛に成れると仰し

さういふ所からこの宗に於ては「三乘眞實、一乘方便」といふことを申すのであります。三乘眞實といふのは、聲聞、緣覺、菩薩といふ三つに分けて説くのが佛の本當の御精神である。一乘即ち一切の衆生が佛になるといふことは、それは寧ろ方便だ、斯う言ふのです。それなら何故一切の衆生が皆佛に成ると仰しやつたか。それはその位に言はなければ衆生が一生命にならなると言ふのであります。だから方便としてその位に言ふのだ。「皆佛に成れるぞ」この位に言はないと中々譯でも一生命にならな。だから寧ろ皆佛に成るのだといふことは、皆を奮發させる爲めの方便なのだ。本當のことを言ふと三つは各々違ふ、斯う言ふのであります。私十年ばかり前に法相宗の管長に會つたら、その管長が「私などはマア定性聲聞種性の方でございませぬ」と自分で言つて居りました。大分老人であつたが、その人は聲聞で濟ませる積りらしい。「あな

やるがどうも我ながら險呑だナ」といふ氣がする。振返つて見て、中々自分が佛に成れるといふやうには思はれない。色々間違だらけでありまして、判つたやうでも判らない事が多い。併ながら佛に成れると仰しやつたのだから、又この世の五十年、六十年ではないから、永遠の命の中に於ては出来るかとも思ふが、併し何だか覺束ないやうにも思ふ。さういふ人にはこの説は宜いのです。「生れつき聲聞だけにしかなれないものだ、幾ら騒いでもなれないといふのだから仕方がない、多分自分は聲聞位になれるものだらうから、この程度で休んでしまはう」斯ういふやうな氣になるでせう。マサカ私なども無性有情ではないだらうと思つて居るけれども、佛に成れるかどうかといふことになる、餘程これはシツカリした決心を持たなければ成れさうもない。さういふ骨折を惜しむ人情には斯ういふ教がよく合ふ。それでこれは中々勢力があつたものであります。

た方はまだお若いから、これから先モット奮發したら宜いでせう」などといふ加減なことを言つて居りました。その時分は私も若かつたのですが、ソナナことを言はれて、「この人はこんなことで安心して居られるのか、洵に吞氣な人だナ」と思つた。その時分には法相宗の教義を知りませんでした。ところが段々法相宗の教義を調べて見ると、さういふこととがあるので、「ア、自分の方の教義に基いて言はれたのだ」と後で氣が付いたやうなことであります。さういふやうな譯でありまして、法相宗に於ては五性各別といふことを申すのであります。斯ういふ説もあるのでありますから、斯ういふ教が弘まれば、無論法華の弘まるといふことは丁度衝突する譯でありませう。

そこで此の派の人の言ふには、斯ういふのが本當なのだからして「無性有情と決定性の二乘」即ち聲聞になると決まつたもの、緣覺になると決まつたも



のは「永く佛になるべからず」何時まで経つても佛の境界にはなれない。この説はお釋迦様の仰しやつたことで、お釋迦様の仰しやつたことには二言はないのでありますから、一たび「永不成佛」佛に成れないと決まつた以上は、日月が地に落ちようとも、大地が覆らうとも、これは決して永く變ることはない。それだから假令法華經を信じようとも、或は華嚴經を信じようとも、或は涅槃經を信じようとも、ドシナ經を信じて、ドシナ經の中に一切の衆生が佛に成るとあつたとしても、それは所謂方便で、皆を獎勵する爲に仰しやつたに過ぎないから、どうも無性有情と決定性の聲聞緣覺といふものは佛に成ることは出来ない、斯う言ふのであります。

まつ眼を閉て案ぜよ、法華經、涅槃經に、  
 決定性、無性有情正しく佛になるならば、  
 無著、世親ほどの大論師、玄奘、慈恩ほ

法華經を讀み、涅槃經を讀みながら、この五性各別といふことを信じて居るとすれば、これは實に深い意義があるのだらう。讀んでも法華經や涅槃經の方が寧ろ方便だといふことを見究めて居るから、法華經、涅槃經に執はれないで解深密經を探つたのだ。だから末の世に生れて無著や世親に及ばない、玄奘や慈恩に及ばないやうな人が、自分の解釋一つで皆佛に成るなどと思ふのは借越千萬だ、ソシナことが出来るものではない。斯ういふ風に、法相宗では議論をするのであります。一應チヨット聞くと尤もらしい。それにマア人間は皆弱味がありますから、考へて見ると佛に成れさうもないナと思ふ所に、さういふ議論がありますから、成程尤もだナといふことになるのでせう。

殊に無著菩薩などは彌勒菩薩に會つたといふのだから、若し法華經が本當だと思ふなら、彌勒菩薩にお目に掛つた時に、法華經にあることとあなたの仰

どの三藏人師、此をみざるべしや、此をのせざるべしや、此を信じて傳へざるべしや、彌勒菩薩にとひたてまつらざるべしや。汝は法華經の文によるやうなれども、天台、妙樂、傳教の僻見を信受して其見をもつて經文をみるゆへに、爾前に法華經は水火なりとみるなり。

若し疑があるならば眼を閉て能く考へて見よ。皆自分のことを考へて見ると判るだらう。自分でも自分が佛に成れると思ふか、それは思へないだらう。靜に考へて見れば判ることだ。若し法華經や涅槃經の言ふやうに、ドシナ者でも間違なく佛に成れるといふならば、無著とか世親とかいふやうな、論を作るに勝れた學者、又玄奘とか慈恩とかいふやうな諸宗の教義に通じた人が、法華經を讀まない筈はないのだ、涅槃經を讀まない筈はないのだ。だから

しやることとは違ふと質問をすれば宜い。それを問はないのは、法華經や涅槃經は方便の教に違ひないのだ、斯ういふことを主張するのであります。さういふことを考へないで、後世の天台の教を信する者が、法華を信する、法華を信すると言つて居るけれども、それは法華を信するのではない、天台といふ者の言ふことを信するに過ぎないのだ。天台と無著、世親といふ菩薩達とを較べて見れば、菩薩達の方が遙に上なのだ。だから天台、妙樂が一切の衆生は佛に成ると言つても、ソシナことは捨て、無著、世親の五性各別の教を信じたら宜い。それが確に佛の御精神にも適ふのだ、斯う言つてこの宗は自分の教を弘めて行くのであります。今では法相宗はソシナに日本では大した勢力を持つて居りませぬから、さう、ムキになつて議論をするにも及ばないのでありますけれども、一時は斯ういふ宗旨が弘まつたのであります。

これは何も詳しく言はないでも宜いのですが、チヨット申して置きたいことは、五性各別といふことは、成程天台の教や法華經を信する人は信しない筈でせう。併し實際に於てどうでせう、亂暴なことを言ふやうですが、實際に於て今日蓮宗だの法華宗だのと言つて居る人が、本當の法華經を信仰しないで御利益主義、御祈禱主義をやつたりするのが、理論は兎も角、事實に於て多いといふことは否定出來な

いでせう。アツチでもコツチでも皆五性各別をやつて居る。「自分の所は病氣が治れば結構だ」「自分の所は金が儲かれば宜いのだ」と言つて居る。だから法相宗そのものは弘まらないが、法華を信じて居る人に事實の上に、法相宗が根を張つて居るといふことが言へるのでありまして、これはどうもお釋迦様に對して濟まない。皆振返つて見ると斯ういふことをやつて居る、そこはお互に氣を付けなければならぬことであらうと思ひます。日蓮上人が昔の事を

批評したのではないのであつて、この批評は能く考へて見ると今の世にやはり當嵌まることになりませう。先づ斯ういふことで法相宗が佛の御本意に適はないといふことを明に申された。それでこれは法華經とは到底兩立しないものと見なければならぬ、斯う言ふのであります。

華嚴宗と眞言宗は法相、三論にはにるべくもなき超過の宗なり。二乗作佛、久遠實成は法華經に限らず、華嚴經、大日經に分明なり。

これで法相宗の批評は終りました、今度は華嚴宗と眞言宗であります、これは法相、三論などには似ることの出來ないやうに、教義そのものに於て勝れて居る。何故なら二乗が佛に成るとか、佛が久遠のものだといふのは、法華經だけに限らない、華嚴

經、大日經にもあるのだといふ議論をするのであります、大日經にもあるのだといふ議論をするのでありますから、これは世間的の勢力だけ頼むのではありません。教義の上にて法華經に迫つて見ようといふのでありますから、これは非常に大事な宗と言はなければならぬ、斯ういふのであります。これは成程さうなのです。華嚴宗でも法華經の二乗作佛のやうなことは言ふ。それは華嚴經を讀んで見るとそのことは言つてある。今まで聲聞であつても緣覺であつても、大乘の修行をすれば結局佛に成るぞといふことは確に言つてある。それから又毘盧遮那佛といふものが根本の佛であつて、その佛の力が有らゆる佛になつたといふことも言つてある。そこでだけ言へば成程華嚴經と法華經とは同じだとも言へるのであります。ところが法華經には二乗が佛に成るといふことを言つて、これは釋迦牟尼佛に歸依することに依つて佛に成ると斷つて、その釋迦牟尼佛は如何なる佛だといへば久遠の本佛の現れだ、斯う言つて居る、

そこが違ふのです。二乗作佛だけは同じことを言つても、久遠の本佛だけは同じことを言つても、その二乗作佛の本は何だ、久遠の佛といふがその佛は何だ、斯うなる所そこに華嚴經と法華經と違ふ。言葉だけを見ると同じやうに見える。例へば「親父」と言つても色々な親父がある、それと同じです。甚だ俗な譬を言ふやうですが、親父とは何だと子供に聞くと「家のお父さん」と言ふ、向うの家では向ふの家のお父さん……こつちの家ではこつちの家のお父さん……それでは同じではないかと言ひますが、同じやうでもお父さんの内容が違ふ。それと同じであつて、佛に歸依すればといつても、その佛の解釋、その佛の見方が、華嚴經、大日經と法華經と違ふ以上は、二乗作佛、久遠實成を説いてあるからといつて、同じだといふ議論は出來ないのであります。その二乗が何に依つて佛になつたか、その久遠の佛はドンナものだ。此處を突止めた時に、法華經と一致

しなければ同じではありません。やはり違ふのであります。だからどれでも同じだといふことはありません。併ながら教を弘める上に於ては都合が好いものでありますから、さういふやうに持つて来るのであります。

また大日經でもその通り、大日如來といふものが唯一の佛である、この大日如來を信する者は聲聞でも縁覺でも佛に成る、斯う言ふけれども、その大日如來といふものと、娑婆世界に現れて現に吾々の目の前で教をお説きになつて居るも釋迦様との關係がどういふものであるといふことをハッキリして呉れなければ、折角の大日如來は空に浮んだ佛になつてしまふ。その點に於て確に法華經と違ひます。法華經に於ては、吾々の目の前に現れたも釋迦様といふものは、久遠の佛といふものを通じて現れた佛だ、こゝの所をハッキリと言はれるのでありますから、そこに於て大日經との違ひが現れて来る。たゞ根本

のものを一つ掲げて出して来るといふのならば、大日如來と名づけても毘盧遮那佛と名づけても、久遠の本佛と名づけても、同じやうなものであるかも知れない。大事なことはこの續きです。吾々の目の前の釋迦牟尼佛と、根本の佛様とのこの續きを明にしなければ、宗教として本當に力の有るものと言ふことは出来ません。その點に於て法華經を信すると、天台の説明といふものが非常な力の有るものになつて来るのであります。

これは教義上の問題でありまして、中々面倒なことであります。こゝの所を讀むに付ては此の事は一通り申上げて置かなければならぬのであります。チョット現れた所を言ふとこゝの所は似たやうになるのであります。それで大變亂暴なことを言ふやうであります。自分が疑問がないからそれで済まさうといふ卑怯な考はいけません。今の自分はこれだけでモウ疑問がない、斯う言つても、自分がモット

智慧が進んで來たら疑問が起るかも知れない。また自分は疑問がなくても、自分よりモット智慧の進んだ人は疑問を持つかも知れない。今の自分は疑問がないからこれで済まさうといふ議論は、徹底した考ではありませぬ。だから或る人に依れば、その人現在の状態で言つたらば随分低い佛教で安心して居るかも知れませぬけれども、その人が何時まで安心して居られるか、その人が他日又モット智慧が進んだら安心しないかも知れなぬ。だからドンナ人間がドンナ研究をしても、ドンナに調べてもどうしても動かすことの出来ない根柢を持つた宗教でなければ、吾々が自分の信仰とする譯に行かないのです。今の自分だけで解釋するといふことはいけません。これは餘程大事な問題であります。よく世間の人は「どれでも善さうなのを信じて、それを自分の宗旨とすれば宜いではないか」と言ひますが、それでは宜くありません。今満足して居つても、その人が段々

智慧が進んだ時に満足しなくなるかも知れませぬ。

「マアこれで……」といふのはいけません。丁度土手を拵へないで川が溢れるやうなものです。「マア大丈夫だ、これで大丈夫だ」と思つて居る内に、何時の間にか水が溢れて来る。だからマア／＼といふことはいけません。それでその所を天台にしても傳教にしても、日蓮上人にしても非常にやかましく言つて居る。何處まで行つても崩れないやうな土臺を作つて置かなければならぬ、今の所で満足をしてはいけません。ドンナに智慧が進んでも、ドンナに世の中が複雑になつても、何が打かつて來ても崩れないだけのシツカリした土臺を持つた宗教でなければ宗教としての永遠の命はない、斯う言はれるのであります。お互ひに宗教を信する人はそれだけの決心をしなければならぬのであります。目の前だけで考へて妥協して行かうといふ考を排斥しなければ、本當の信仰を決定するといふことは出来ないのです。

ります。これは序でありませんが、日蓮上人の御態度　ふことを互ひに心得て置きたいと思ふのでありま  
が何時でもさういふ態度でありましたから、さうい　す。  
（第十四講了）

## 日蓮 聖人 觀心本尊鈔講義

講師、小林一郎先生

日時、毎週火曜日午後七時—八時三十分

場所、統一會館講堂

舉國精神總動員の秋に臨み、歎んで困苦忍難の分度生活を實現せんとするには、根本に正  
しい宗教の信仰が第一に與へられねばならぬ。爰に本講座こそ我國民精神に一大光明を投  
げかくるものである。盡忠報國の士女！奮つて來聽、信仰の妙味を把握せられよ。

## 釋尊の御成道

磯部満事

今月は 大聖釋尊の御正覺を不現遊ばした意義深い月である、佛教は實にこの御成道からその尊い教  
が説かれ出したことを思へば、寔に感慨深い記念の月である。

翻て現在の佛教、特に法華を信奉する者の状態を見ては、七百年前、日蓮聖人が、  
弟子一佛の子と生れて諸經の王に仕ふ、何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀情を起さざらんや。  
と洪嘆遊ばした事を、今日にも猶ほ繰返さざるを得ないことを大に悲しむ者である。

歐米文化に陶醉せる現代人は、佛教の片鱗も知らない癖に、佛教を排斥せんとして居る、佛陀の尊嚴  
をも辨へないで、印度の黑人扱にして居る。此等の輩は恰度天に向つて睡する類である。そこには迷信  
も蔓るであらうし、墮落もしやう、鬨争も起らう、不安に襲はるのは當然の歸結であると思ふ。日蓮聖  
人が、

天下萬民諸乘一佛乘となつて、妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く  
風枝をならさず、雨壞を碎かず、代は義農の世となつて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を

得、人法共に不老不死の理顯れん時を御覽せよ、現世安穩の證文疑あるべからざる者也。と示されしは、何の時代でも動かすことの出来ない真理である。

我が忠勇なる將兵が、或は峻峻を攀ぢ、或は劉濫に浸つて、名狀の出来ない苦難や缺乏に堪へ、強敵を撃滅されて行くことを見聞すればする程、銃後の國民は一致團結を強固にして、その有終の美を結ばねばならぬ。それには各自がその本心に覺醒し、反省自重することが先決の重大問題ではあるまいか、この本心の覺醒は崇高なる宗教の信仰に據ることが一番簡結であり、効果百パーセントである。而して崇高なる宗教の信仰を獲得しやうと思へば、先づその教主である超人格者とは如何なるお方にましますかを研鑽し、そこに信念を喚發すべきである。徒らに教理の検討に没頭して智者學匠になつても、信仰から離れた時には恐ろしい奈落に没在するであらう。

信仰の目的が、理想文化の建設であり、それには最高人格の完成にありとするならば、即ち成道は釋尊のみの成道でなく、お互に於ても成道を念願すべきであり、その超人格、所謂佛陀觀をしつかり把握せねばなるまい。それには直卒に法華經、特に如來壽量品を精讀すべきである。實に如來壽量品は、『佛敎の心髓』であると先師は高調された。

紙數に制限されて極めて簡單ではあるが、希くはこの際、一段と熱誠を籠めて 釋迦牟尼世尊の本地を鑽仰されんことを。

## 北支より

### 一、現地の從軍僧

現地で活躍する從軍布敎師であるが、布敎師といふから議論が生じて喧しくなる『從軍僧』であり、『軍屬』である私は僅か十日ほどしか前線に居なかつたので大きなことは云はれぬが、體驗だけは尊いものを得たと思つてゐる。

普通に内地式な考へ方で『布敎』と云へば、僧侶の説敎なり講演なりを意味してゐるやうだが、砲煙彈雨の中で命がけに戦つてゐる兵隊である、果して『お説敎』が耳に入るだらうか？ 這入らぬから彼等も聽きたがらぬし、坊さんもやりたがらぬ、殆んどやつてゐない。よほど無鐵砲な本田仙太郎式の人なら兎も角、普通の感情と心臓の持主なら一寸やれさうもない。實際第一線での情景は新聞でも寫眞でも寫せませ

北平の小林師が、非常にお忙しい中から特にその實感をお寄せ下さつたので、許された範圍に於て皆様の御高覽に供しませう。

### 小林 啓 善

ん。空には間斷なく空軍の爆音があり、陸には戰車の軌む轟然たる地響、砲車と軍馬と兵隊の波だ、軍裝を解くのは戰爭の終つた日でなければ許されぬ、いつ前進の命が下るかも知れない、落ち着きのない焦々した戰場の氣持、辨當を喰つてゐる間も傳令の交叉に心が踊る。若し夫れ野砲重砲の援護が開始されたとなるや、空には手にとるやうにビュー／＼と小銃彈の訪れに交ちつて、時々ビュー／＼の巨彈の川が流れる、兵隊はこの時、國を出てから何度目かの決死の覺悟を『今度こそは！』と固めるのだ。若い坊さんの説敎を聞く迄もなく兵隊の決意はとつくに出來て居るし、未來觀もなにも戰場特有の宗教によつて支配され、極めて容易に安心の域に達して居る彼等である。それは戰爭を知らぬ人には『戰

場宗教』を編むことは出来ない。私は前線に出たとき、弟から贈られた國旗の赤丸の中へ、南無妙法蓮華經を墨痕鮮かに書いて持参した。將も兵も、私にだけは『縁起』を云はなかつた。清正の故事を云つて戦勝の前ぶれだと歓迎してくれた。私は何も云ふ必要がなかつたのであつた。

最前線から野戦〇〇所へ戻り、野戦病院へ戻つた。否部隊の前進を見送つて、そのまゝ前夜の地點に残つて居ると、そこへ直ぐ〇〇所が前進して来る、そして前進した〇〇所の跡へは野戦病院が遣入るのである。部隊を見送つてその地點に残つて居ると、同じ場所が任務と名稱を變へて前へ前へと進んでゆく。私が〇〇から前進渡河行軍する部隊を〇〇に留つて見送つたときでした。その部隊に従軍して居る僧侶は大谷派の將美師外二名と、本門法華宗の梶谷泰通師の四人が、〇〇部隊に配屬されて居ましたが、残念乍ら必ずしも圓滿には行つて居なかつた。私が最も敬服したのは將美師でした。年の若いに似合す行届いた人で、少しも理窟や文句を云はない朝と夕とに死體收容所で讀經回向をする、歩哨でも兵隊でも會ふほどの人には『ご苦労さんでございます』と云つて心かなる挨拶を述べる。手を失ひ、足を奪はれた重傷者の手紙

たのだらう、一本の羊羹はあつけなく片づけられてしまつた將美師も空腹だつたに相違ない、私も咽喉から手の出る思ひであつた。然し彼はいとも満足氣に空腹を忘れて行軍してゐました。私は何だかこの人が神々しいものに見えてならなかつた。私よりも四五年後輩であること、私を知つてゐると云ふことを別際に聞いた。

その他の従軍僧も、皆兵隊と何等變る所はない、姿なり形なり、刀をたばさみ拳銃を持ち、鐵帽を背負ひ、その格好たるや正に山僧も旗を捲かしむるものがあり、〇〇部隊長も『こんな坊さん初めて見たぞ』と云つて笑つてゐた、それほど危険は、等しく従軍僧の上にも迫つてゐるのであります。

總じて戰場では理窟は要らぬ、地位も名譽も金持もない、皆が同じ戦士である。躬を以て行ふ者が第一の布道家である。ある僧が食事も宿舍も將校並に取扱つてくれと要求した、副官は彼の乞を容れたが、とたんに彼師は信を失墜してしまつた。誰もこの人には枕經を頼まなくなつてしまつたので、ただ従軍して軍の糧食を嚼つてゐる鼠と同じやうな存在になつてしまつたことを〇〇の司令部で聞かされた、これでは従軍されて迷惑だといふ結論しか持ち得ないのであつた。戦場の

の代筆をする。三十人、四十人、書ける體の人でも代筆を依頼するので、朝から晩までペンを持ち続けても、あれだけの要求には應じきれない。彼師は少しも嫌な顔をしなかつた。リニツクサツクから羊羹やキャラメルを出すとき、きつと兵隊にすゝめる。糖分不足の戦地では、一つのキャラメルも尊い薬餌であるが、彼は惜しまない。〇〇から〇〇へ夜間行軍をしたときであつた、前進命令は明朝だと云はれてゐたが、午後十時即時出發の命令が下つた。〇〇へ到着したのは午前八時である。朝食の炊事が始められ味噌汁だけは出来たが、飯は今發蒸したばかりといふときだつた、再び〇〇への前進命令だ、もう汁も飯も見返つては居られない、當番だけが残つて部隊が前進し出した。大毎の記者が三名サイドカーで先驅して行く、(彼等は翌日二人戦死、一人重傷した)腹はペコ／＼にへつてしまつた。兵隊は乾麵を嚼り初めた、行軍と乾パンで一滴の唾も出て来ない、咽喉がヒリ／＼する。將美師は最後の羊羹を取出し、ナイフでいくつかにブツ／＼と切つた、そして彼は『兵隊さん食べやう』と云つて差出した。積れた黒い大きな手が、忽ちの内に一塊りづゝ處分してしまつて、將美師の掌には包装紙だけが残つた。兵隊さんは甘味に餓えてゐ

布教は實にその人の誠實と不言實行のみに依て爲し得るものであつた。次に従軍僧の任務の二に火葬のあることを付記せねばならぬ。火葬のことに就ては別にこれを記さねばならぬが、あの嚴肅な火葬の場合、しみ／＼と従軍僧の尊い天職を自覺させられるのである。最前線の僧の仕事は比較的乏しい喜ばれるのは慰問品の配給と火葬の場合であるが、慰問品は限りがあつて、紙でも煙草でも後方との連絡があつて續々送られるとか、或は常に都市へ往復して買求めれば別であるが、多くは持つて行つた品は即刻配給し盡し、あとは殆んど慰問らしい慰問は出来ない、只差支なき限りに於て軍務の手傳ひをしてゐるから、慰問使は變じて軍屬となるのである。本願寺など多數に慰問使を出してゐるが、その中にはいつの間にか、軍囑託を命ぜられて、通譯とか書記とかに従事してゐる人も相當多かつた。

野戦病院などの従軍僧はかなり妙な立場に居る譯で、重傷者などに對して寧ろ布教の必要があるのに、負傷者にはなるべく僧侶であることを知らしめないやうにしてゐる、即ち『死』と『僧』とが一つに見られ『縁起』が悪いと考へられてゐる關係上、従軍僧はなるべく重傷者の目にふれるのを

差控へてゐるやうだ。實際病院などに屯ろしてゐると、『坊さんまで用意してある』の感深く、死ぬことを待つてゐるかのやうで氣のひけることおびたゞしいと云つてゐた、然し病院あたりでは眞に従軍僧が役に立つもので、あの手紙の代筆だけでも功德は甚大である。野戦病院と云つても、北京や天津と云ふ都市に設けられたものは、日本の居留民も多く國防婦人會や愛國婦人會の方々の献身的な看護もあつて足りない乍らも傷病兵の用は辨じられてゐるが、最前線の野戦病院等では限られた軍醫と看護兵であつて到底傷病兵の手術や手當以外の用は辨じられない、次から次へ收容される勇士の應急手當に忙がしく、激戦地では掃帚の如きでさへ三日に一度しか取替られないと云ふ有様であつたから、凡そその状況は想像にあまりあるものがあらう。かゝる修羅場で従軍僧が、血臭と腐血と蛆蟲をさへ厭はなく、眞の菩薩行を行するつもりで奉仕するならば、どんなに感謝されるか分らない。私が〇〇の野戦病院を見舞つたとき、〇〇部隊下の傷病兵であつたが代筆をさせようと云つて重傷者から次々に書いてあげた。あの人は共通して一つの感念を持つてゐることに氣づいたことである。即ち初めどんな風に書きませうと云ふと、負傷の際の状況と負傷の様様を逐一書いてくれと云ふので、それを聞いたまゝに書き綴つてゐると、一寸待つてくれと必ず中止

を命ずる、そして『傷はたいしたことはないから心配してくれるな』と云ふ風に、極めて通り一べんの通知狀に書き改めさせるのであつた。私はこの心理に對し、つまり個人の苦痛と、軍人としての名譽の負傷とを混同せぬ軍人精神の發露に對し敬意を表した。が、そこに又『個人』何某君を慰籍すべきものが多く殘されてゐることを感ぜずには居れなかつた。私は當時の思出の中にどうしても忘れられない暗いものがあるそれは廣島から來てゐる兵で、兩眼と右腕やられた人があつたが、その人の手紙を書きかけたとき、〇〇部隊長から呼ばれて隊長と共に急遽前線の視察に赴き、歸隊したその夜直ちに全員出發の命令が下つた爲め、遂に書きかけの手紙をそのままにしてしまつたが、數日の後にその人は名譽の戦死を遂げてしまつたといふのであつた。私は今でもこの思出に胸のうづきを感じてゐます。

## 二、面子と宗團

支那といふところは實に不思議なところでありませう。人間は極端な個人主義に出來てゐて、その家屋を見たゞけでも支那人の習性が窺はれるのである。彼等は税金を課せられるとき、間接税はいかに高率でも文句は云はないが、直税となると大いに文句のある人間である。それでゐて宗教界に對し

ては案外寛大で宋哲元ですら、北京及びその近縣にある喇嘛寺に對し、毎月三千餘元の補助を與へてゐたし、佛教や回教に對しても同様の『慈善』をやつてゐた。彼等が座食しやうと働かうと、宋は宋の『面子』の爲めにやらすに居られなかつたのであつた。冬期になると北京市内に三十餘ヶ所の施粥廠が設けられる、こゝでは無数の市民が粥を施されて腹を温めるのであるが、その經費たるや莫大なものに達してゐる、施粥を蒙るものは必ずしも幼老病者のみでなく、汎く市民がこの恩恵に浴してゐるのである。事變後にも八ヶ所は既に實施中であるが、凡そ北京位慈善事業の發達し且成功してゐる所はない、紅卍會でも萬國道德會でも、世界に知られてゐる宗教團體の仕事と云はゞ、殆んど慈善事業が主なる仕事であると云つてもよい。

然らば一體どこからこんな經費が捻出されるかと云ふと、それは實に支那人の『面子』と、芝居の所産である。彼等が芝居を好むことは愕ろくべきもので、芝居でさへあれば切符は飛ぶやうに賣れる、勿論高價な切符である。それが『慈善』の爲めに行はれるのであるから買はずには居られない。かりに例外として芝居を好まぬ者があつても、彼等には『面子』だけは敵としてある。『面子』の爲めには二階正面の一枚は買取らねばならぬ、出演者にしても有名であればあるほど高い『面子』をもつてゐる、夢にも出演料などのことは云へた義理

ではない、そこに『慈善』屋の活躍する餘餘があるのである支那のこの異狀なる慈善事業の發達は實に『面子』の所産であると云はれる。

宗教方面でもその例に漏れず、悉く『面子』によつて興廢してゐるのである。有名な僧侶には概ね大檀那がついてゐて大檀那の『面子』だけの生活と活動をやつてゐる。然し建物等は荒廢に委せ、よほどの心掛のよい人でない限り寺塔を營むやうなことはしない。僧侶も朝鮮のやうに葬儀屋の大夫の一部としか考へられてゐない、即ち棺をかつぐ者、樂器を持つ者、其他様々の器具を持つ大夫と、僧侶は各自樂器を奏し讀經をする大夫（大夫以上の何ものでもない）でしかない。回教の如き極端に豚を嫌ひ、羊を常食としてゐる、その羊も豚市場に運ばれた羊ならば、回教徒は斷じて買取らない。羊は羊だけの市場で賣られねばならぬ。その羊を殺す役目を司るのが回教僧である。彼等は信者の自宅なり羊肉屋なりを毎日巡回し布施を貰つて羊の首を斬つて廻るのである。即ち回教僧に殺して貰つた羊でなければ、彼等は絶対に口にしないのである。これ等の習慣は決して篤い信仰から行はれてゐるのではない、墮勢を面子がやらせてゐるのである。支那人が面子を捨てたら宗教團體は明日を待たずして自滅する程度であらう。今後の興廢には政治的意味も之に加つて來るであらうが、民族性としての面子第一の觀念は不動のものであらう。

# 銃 後 録

木 田 芳 雄

**省修** 今正是其時。何か一言なかるべからずと机にむかつて

ペンを執つたが、不圖身の廻りを見まわして悔とした。文飾無義の言葉を並べて、大言壯語をこゝとしてゐた男の住居のまじめさを強く感じたからである。嗟。人いづくんぞ嘆さんやか！ こんな歎聲を擧げながら、亂雑にとりみだされた居間を眺めた。其處にはスキだらけの生活が置かれてゐる。どの持物も、どの書物も、お前の心の偽善性をマア見て呉れと言はぬ顔に、塵にまみれてのさばつてゐる。なかば来て、高根を見ながら、この現實を凝視した時、これ又なんとした事であらうか。自分は恐懼にたへないのである。今こそ自分は心を引きしめて、身の廻りを整理しなければならぬと感じた。そして死んでも悔なきように心身を保ち、美しい生活を持つべきだ。観音經の中に「一毛をも損すること能はず」とある。さうだ、毛すぢばかりのソツもない、ちつともスキのない生活を創新せねばならぬのである。こんなことは一生かかつて出来さうに思へない、無窮の道とも言ひ得よう。でも、この意識を深めて、一步より一步と、より高く上昇り行

くことは出来る筈である。まことに吾人は、過去を活かして未來に伸びる、此の現實に勇躍すべきだ。

**無窮の道** 吾人は人事を盡し、天命に順つて、今こそ さしちがへて死なんとする大楠公兄弟が、

七度、此の世に生れて、國賊を滅さん

と誓ひつゝ莞爾として護國の鬼となつた心意氣を、如何に高く仰ぎ見ることであらうか。そしてこの魂がいかに多くの分身を生みだしつゝ世々代々に日本臣民の心に生き、悠久に皇國を護念しつゝあることか。おそらく、この苦行はこの地上に、寂光土が建設せられて眞の平和が實現する迄は、瞬時も止まることなく相續せらるゝことであらう。これが無窮の道なのである。これは又心内の賊滅を期する人間の攻撃精神である。そして又一切世間の病患を癒やすべく善行の淨血を進める人間の努力でもあるであらう。今こそ吾人は更に新しく日本人たるの意識を深め、大日本の天業を自覺すべきだ皇國こそ世界の心臓なのである。我等はこの使命のもとに心

を一にして、どこまでも進まねばならぬのである。……皇國

の威徳を顯揚すべき無窮の道……されば新淨なる血液は一せいに循環して、もろもろの疾患を癒やしつゝ全世界の隅々に迄、躍動して行くであらう。かくて天地は新生するのだ。

この崇高なる使命のもとに心が一すじに働くとき、ナンデいまはしい階級闘争や勞資の磨擦がおこり得るだらうか。そんなスキはない筈だ。むらがり萌す貪欲も願志も愚痴も嫉妬も傲慢も、ありとあらゆる人間性の弱點は、一道清淨なる意志の力に統率せられて……強き團結の生活の……勤勞の和泉から、新しい力の水が湧出するのだ。そして次から次へと新しい道を開いてナンの凝滞することもなく前進をつゞけるのだ。

前進！ 前進！ 警鐘はしきりにひびく。北支の野から、上海の空から、遠くスペインの庭からも。今こそ我等は聲も高らかに一心欲見佛と合唱し、不自惜身命と踏み出すべきだ。これこそ最も積極的なる攻撃精神であらう。そしてこれこそ不退に進み行く上行への情熱だ。この神兵の行くところ、いかに根づよき心中の頑敵でもやがては退散するであらう。況んや山中の賊をやである。我等はこの道を發願して、たとひ苦しくとも、むつかしくとも、心の力、身の力を打ち込んで進みに進み行かねばならぬ。

前進！ 前進！ 堂々たる直道を……こは人間の本懐だ！そして、これこそは今や斷乎として、中外に施しつゝある日

本及日本人の剛邁なる態度であらう。

**さらば** 我等は常に念じて無窮の道を恭敬して、もろもろの欲望をうちはらひ、各自の生活を充實することに依つて、新しい力を生み出しめねばならぬではないか。それには當に爲すべき當面の仕事に魂を打ち込んで、自分の成果を擧ぐべきであらう。なぜなら、この、日々稼業こそ、新しい力を産み出すべき唯一の理由であるからだ。異體なれども一心なれば皆これ分身なのである。各人の職業や、境遇は萬變であらうが相率ゐてその本分を全うし、共に共に溶けあつた一味の淨血を進めるべきであらう。これこそ萬人の誰でもが施すことの出来る氣高くも勇々しき骨折りなのである。そしてこの骨折りがあつまつて、この地上をして幾分かづつでも寂光土に近づけよめるべく、悠久に、快よい努力を捧げることこそ、人間窮極の目的であらう。吾人はかく信ずると共に、虚空の聲に應へねばならぬ。

あゝ、大和日本への無窮の道は我が民族の天職であると。然して

今こそ、大和民族飛躍の秋や、來れりと。

萬歳！<sup>x</sup>

と思はず叫んで我等はこの確信を表出する。日本人は率直だ！そして今や國を擧げてこの歡呼に充たされてゐる。(完)



記事

本部 團報

理事長出馬 福島支部秋季大会に際し、昨今特に繁劇なる上田理事長は高障差繰り、法國の爲めに時間カッパに馳せ付けられて、經濟問題も畢竟するに人心の問題に歸着すべきであると幾多の事實を挙げて長時間熱辯を振はれ、翌朝早くも車上の人となり、活躍を續けらるゝ有様であつた。

十一月一日 午後五時より日比谷松本樓に開催の聖聖舞一回大陸文化工作座談會に、磯部理事出席、定例印度革命志士ビハリ氏の感想一端に曰く、世界に二大惡政策あり、即ちソ聯の共產主義と英國の帝國主義である。而して有ゆる仕事の指導者は宗教家でないべからぬ、殊にこの二大惡政を是正せしむべきは宗教家に倚つてなされるべきであらう。何しろ歐洲各國の政策は利益本意なのである、物質に執着してゐるが、文化の基礎は必ず精

神において、人々はこの文化的提携を要すべきである等々。續いて東京回教團々長タルパンガリー氏は、歐露が今日の様になつたのは、精神と物質とを區別した處から端を發して、遂に多くの罪惡を重ねたものが國政を執るやうになり、そこに人は恥といふことから離れてしまつた結果、禮儀を無視する野蠻のやうな生活を迫ることになつた。共產黨員は働いて生活するのでなく、泥棒して生きてゆくものなんである。どうしても法則の根本に於て精神的、宗教的に出發して來れば眞手のものではない。と一神教に基く文化工作を力説し、これから他へ廻らねばならぬと、ボース氏と打連れ立つて去つた。其後各宗の教氏に依つて意見の交換があり、遅く大臣細亞協會常務理事下中氏が顔出されたけれ共、佛敎の本義に就ては遺憾の點が多かつた。時間の關係上お互に語りた事もあつたらしいが遺憾ながら次回に譲つて散會した。

教化大講演會 國民精神作興週間の月でもあり、又一面文永元年、日蓮聖人小松原御法懸の月でもあるので、時代對應の教化として十一月七日第一日曜日午後一時三十分、先づ日

支事變病疫死者の追悼會を大衆と共に營み、更に吾等は御法懸報恩會を復興した。終つて二時十五分より井上純純男爵の『支那事變の背後力と吾等の覺悟』といふ講題の下に續々二時間餘に亘つて、我建國の理想から順次歴史的に現代に及んで世界の狀勢乃至事變の眞相を細説されて、今後日本人の着手すべき天業の事實を指摘啓發された。講堂の聴衆は感極まつて嚴肅に嘆一つする者もなく熱心に耳を傾け、最後質疑の時間まで與へられたので一同大に歡喜し、磯部理事の閉會挨拶に名残り惜しくも四時半散會した。有志は更に會議室に於て井上男を中心に時餘懇談して、豫期以上の成果を挙げたことを慶び合つた。

勸助員懇談會 十一月十日は國民精神作興週會演説記念日に相當し、本年は此日を以て政府が主體となつて官民一致の運動を開始せらるるので、帝都に於ける教化團體代表者の懇談會が、同日午後一時より帝國鐵道協會に開催され、磯部理事出席、相互の連絡に資すべく意見の交換があつた。

幹部會 十一月十四日午前十一時本部に於て

總務及び教務の役員來集して、教化に對する重要協議が行はれた。

御遺文講座 小林一郎先生の親心本尊鈔拜講は、毎火曜日晚に續講されて居る、此際大に來聴を歓迎する。

日曜日講集 毎週の日曜日午後二時より四時半頃迄、本部に於て法要嚴修と法話を續けられ、各位の信仰増進に資せられてゐる。

結婚式 十一月二十二日午後五時、本部御寶前に於て磯部理事式長の許に、西尾家の婚姻大禮が、莊重嚴毅にして且つ時代の最尖端を越へた數ばしい形を以て修せられ、一同極めて和やかな氣分に浴し、式後宗教談に時の移つるを知らざるものゝ如く、燈火管制の交通に不便なるにも拘らずかの『昏時に禮を爲すが故に婚と曰ひ、婦人は夫に因つて成るが故に婚と曰ふ』を如實に示せる法悦に充ち満ちた嬉しい一夜であつた。寔に本門常住三寶の御寶前に、人生の一大事を誓約することは最も意義甚深なるを痛感せしめらる。

福島支部報

大講演會 十月三十日午後六時より市公會堂に於て、當支部主催、高商日蓮聖人續傳會及び朝日新聞社福島支局後援にて、秋期「立正安國大講演會」を開催す。本部より理事長上田先生、理事磯部先生の御來臨を仰ぎ、支部より入江大佐、及び高商生三名出演し、超滿員の盛會であつた。この日たま／＼教育勸誘演説の日に當り益々今日の儘の意義深きを感じた。

- 因みに出演者及演題は左の通りである。
一、信仰に入るまで
一、信仰の本領
一、日蓮聖人の人格一般を偲びて
一、立正安國論の再認識
一、非常時の經濟

一、皇國の大使命
以上 福島支部 入江大佐

年末に際し、本團會計整理可仕候間、團費、誌料等未拂込の方は、至急御配慮相煩度候 敬具
昭和十二年十二月 統一團會計部

本月は 大聖の正覺を成ぜられた洵に意義深い月であります。特に現在の如き大陸文化工作に對する重大な智光を要求さるる砌り 本師釋迦牟尼世尊の徹底せる教誨を仰ぐべきである。且つ顧みて自分も成道に精進せねばならぬ。茲に本部に於て左記の通り法要を嚴修し、訖つて法施の大講演會を開催し以つて謝恩の萬一に擬したいと存じます。

希くは爲道、爲國奮つて來會御清援あらんことを。

日 時、十二月五日（日曜）午後一時三十分開場

講師演題、攝折二道 小林一郎先生

財團 法人 統 一 團

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版 賜天覽	送料共	金壹圓八拾錢
法華經要義		送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義精要		送料共	金貳圓九拾錢
真理の基礎に樹つ佛教の信仰		送料共	金拾五錢
法華經要品		送料共	金五拾錢
日生上人レコード（四面）		送料共	金壹圓廿五錢
日蓮聖人		送料共	金貳拾錢
本尊意識に就て		送料共	金貳拾錢
釋尊の八相成道		送料共	金貳拾錢
法華經の心髓		送料共	金壹圓五拾錢
機部滿事講稿		送料共	金壹圓七拾錢
本多日生上人		送料共	金拾錢
勳行作法		送料共	金壹圓
河合妙明著		送料共	金壹圓
皇道と日蓮主義		送料共	金壹圓

東京市小石川區香羽町六ノ十七  
財團 法人 統 一 團 出版部  
振替東京九四二〇番

月刊「教」誌

東京市小石川區香羽町六ノ十七  
振替口座東京一〇九四二〇番

定 價 一 冊 金 拾 五 錢  
送 一 ヶ 年 前 共 金 壹 圓 貳 拾 錢  
發 行 所 統 一 團

統一團 定價一統  
一冊 金貳拾錢 送料壹錢  
半ヶ年 金壹圓貳拾錢  
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

▲御申込ハ總テ前金ノ事  
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十二年十一月廿七日印刷納本  
昭和十二年十二月一日發行  
(第五百十三號)

東京市小石川區香羽町六ノ十七  
編輯部 滿 事  
發行人 磯 部 滿 事  
東京市四谷區內藤町一  
印刷人 山 田 英 二  
東京市小石川區香羽町八ノ十一  
印刷所 野島好文堂印刷所  
電話牛込六九六六番

東京市小石川區香羽町六ノ十七  
發行所 財團 法人 統 一 團  
電話牛込五三三六番  
振替東京九四二〇番